

熊本県文化財調査報告 第152集

鞠 智 城 跡

— 第 16 次 調 査 報 告 —

1 9 9 5 年

熊 本 県 教 育 委 員 会

序 文

鞠智城は県内で唯一の古代山城であります。

熊本県教育委員会では、遺跡の重要性から、これまでも国庫補助事業や県の自主事業により、15次にわたる調査を行ってきました。

第16次調査となります今年度は、「深迫門礎石」^{あかひらこもんせき} 一帯の調査を行いました。

調査の実施にあたりましては、文化庁、専門調査員の先生方から御指導をいただくと共に、菊鹿町教育委員会、地元の皆様など、多くの方々から御協力を賜りました。

ここに厚くお礼申し上げます。

平成 7 年 3 月 31 日

熊本県教育長 東 坂 力

例 言

1. 発掘調査を実施した遺跡は、熊本県鹿本郡菊鹿町宇長者原を中心に木原台地とその周辺地に展開する古代山城の「鞠智城跡」で、熊本県教育庁文化課が行った。
2. 整理・報告書作成は平成6年度に行った。出土遺物・資料は熊本県教育庁文化課で保管している。
3. 発掘調査は大田幸博〔参事〕がその任にあたった。
4. 発掘調査過程の写真撮影は大田が行い、整理後の出土遺物の撮影、及び空中写真撮影は前田一生氏が行った。
5. 出土遺物の実測は大田が行った。
6. 本書の執筆・編集は大田が行った。

本文目次

第1章 調査の概要	1
第1節 調査の組織	1
第2節 調査の進展	1
第3節 鞠智城の概要	2
第II章 遺跡の概要	4
第1節 遺跡の位置	4
第2節 鞠智城の城域について	6
第3節 鞠智城の築城時期と築城者	7
第4節 鞠智城の門礎石について	7
第III章 調査の成果	10
第1節 深迫門礎石周辺調査区	10
第2節 米原集落周辺調査区	23
第IV章 出土遺物	25
第V章 まとめ	30

挿図目次

第1図 菊鹿町・菊池市位置図	4	第13図 3段目版築土塁検出状況	16
第2図 往還ルート図	5	第14図 深迫門礎石実測図	18
第3図 鞠智城の城域図	6	第15図 第16次調査区周辺地形図	19
第4図 門礎石実測図	8	第16図 第16次調査区（登城道検出状況）	20
第5図 鞠智城内城地区地形図	9	第17図 基石①・精円形状の掘り込み実測図	21
第6図 第16次調査区周辺地形図（調査初期）	10	第18図 掘形・基石②実測図	22
第7図 第16次調査区概略図	11	第19図 調査区周辺地形図	23
第8図 2段目法面実測図	13	第20図 688-1番地調査区	24
第9図 3段目法面実測図	13	第21図 柱穴実測図	24
第10図 4段目法面実測図	13	第22図 遺物実測図①	25
第11図 2段目版築土塁検出状況	15	第23図 遺物実測図②	28
第12図 4段目版築土塁検出状況	15		

表 目 次

第1表	鞠智城の歴史・・・・・・・・・・	2	第6表	掘形観察表・・・・・・・・・・	22
第2表	近年の調査の変遷一覧①・・・・・・・・	3	第7表	遺物観察表①・・・・・・・・・・	26
第3表	近年の調査の変遷一覧②・・・・・・・・	4	第8表	遺物観察表②・・・・・・・・・・	27
第4表	門礎石観察表・・・・・・・・・・	8	第9表	遺物観察表③・・・・・・・・・・	28
第5表	深迫門礎石観察表・・・・・・・・・・	18	第10表	遺物観察表④・・・・・・・・・・	29

写 真 図 版

図版1	深迫門礎石 調査前の状態	図版6	発掘調査風景
図版2	調査区を4段目から望む	図版7	3段目の版築土塁
図版3	調査区を西側から望む	図版8	3段目の版築土塁（東端寄り）
図版4	調査区を東側から望む	図版9	3段目の版築土塁（西端寄り）
図版5	調査区の3段目を東側から望む	図版10	航空写真①（16次調査区を真上から）
図版11	航空写真②（調査初期）		
図版12	航空写真③（米原台地を南東側上空より遠望）		
図版13	航空写真④（米原台地を南側上空より遠望）		
図版14	航空写真⑤（米原台地を南西側上空より遠望）		
図版15	航空写真⑥（米原台地西側の外縁地区を遠望）		
図版16	航空写真⑦（米原台地南側の迫地を東側から望む）		
図版17	航空写真⑧（16次調査区）		
図版18	航空写真⑨（鞠智城跡の南東城を俯瞰する）		
図版19	航空写真⑩（鞠智城跡を東方向から遠望する）		
図版20	航空写真⑪（鞠智城跡を南西方向から遠望する）		
図版21	航空写真⑫（鞠智城跡を西方向から遠望する）		
図版22	航空写真⑬（鞠智城跡を西域を俯瞰する）		
図版23	航空写真⑭（深迫門礎調査区一帯）		
図版24	航空写真⑮（池の尾門礎と「大門」ルート）		
図版25	池の尾門礎石	図版30	土塁線写真 二（南側より）
図版26	池の尾門礎石	図版31	土塁線写真 ホ
図版27	土塁線写真 イ	図版32	土塁線写真 ヘ
図版28	土塁線写真 ロ	図版33	堀切集落と鞠智城跡の最南縁線
図版29	土塁線写真 ハ（東側より）	図版34	日の岡山の遠望

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査の組織

調査主体	熊本県教育委員会
調査責任者	桑山裕好（文化課長）
調査・整理担当	高津義昭（主幹・文化財調査第1係長）
発掘調査	大田幸博（参事）
調査指導	堀内清治（熊本県文化財保護審議会 会長・熊本工業大学建築学科 教授） 坪井清足（（財）大阪文化財センター 理事長） 岡田茂弘（千葉県佐倉市国立歴史民俗博物館 教授（情報資料研究部長）） 小田富士雄（福岡大学人文学部 教授） 武末純一（福岡大学人文学部 助教授） 河原純之（奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財センター長） 牛川喜幸（奈良国立文化財研究所 飛鳥藤原宮跡発掘調査部長） 澤村 仁（愛知みずほ大学人間科学部 教授） 甲元真之（熊本大学文学部 助教授）
報告書作成	大田幸博（参事）
調査事務局	白井哲成（課長補佐） 丸山秀人（課長補佐） 木下英治（主幹・経理係長） 高濱保子（参事） 中村幸宏（参事） 緒方宣成（主任主事） 高宮優美（主任主事）
協力者	北原美和子（文化課嘱託） 〔菊鹿町教育委員会〕 吉里哲也（教育長） 早田明徳（課長） 金光顕史（文化係長） 早田弘隆（主事） 〔米原地区〕 木庭春生（菊鹿町文化財保護委員） 本田啓介（保護委員）

第2節 調査の進展

- 平成6年度の第16次調査は、地域の東南区域にあたる深迫門礎石^{フカセカドノイソノイシ}一帯の発掘調査に主力を注いだ。深迫門礎石は、地元で「^{イソノ}石」と言い伝えられており、弓形状の谷部を刻む階段状地形（段々畑）の4段目にある。
- 調査前の様子は1～3段目までがかなりの荒地で、法面に積えられた薪^{カシ}・三叉^{ミツノ}（和紙の原料）の低木が繁茂していた。4段目は畑地で、所々に野菜が植えられていた。これに対し、5段目はイチョウの若木が所狭しとびっしり植えられており、これらを伐採しない限り調査不可能な状態にあった。そこで、地権者に迷惑をかけないと判断した4段目までの土地を借上げて調査に入った。
- 地権者から「4段目の法面が過去に土砂崩れを起こした」と聞いたため、防災面には特に気を使った。各段ごとに欠板を打って、降雨時における排上の流出に備えた。
- 調査は門礎石のある4段目から着手した。その後、3段目、2段目と調査を進めたが、1段目は畑の幅が2mぐらいで、3段目に見る遺構の埋没も非常に深い所から掘削せず、排上場として利用した。
- 平成6年は記録的な少雨であったため、梅雨時期を迎えても幸いに防災面で心配な事は発生しなかった。しかし、調査の面では土壌の乾燥に悩まされ、遺構の検出が極めて困難であった。さらには、これに猛暑も加わったため、ただでさえ無風状態の谷部はサウナの如くとなった。
- 秋口からは、地元から提供のあった散水器で常に放水しながらの調査となった。したがって、調査そのものが目に見えて進展したのは、冬場になってからであった。

[7] さらに、これと平行して、町道沿いと集落内の2ヶ所で発掘調査を行った。

第3節 鞠智城の概要

正史『続日本紀』の文武天皇二年(698年)五月の条に「鞠智」として初見され、『三代実録』元慶三年(879年)三月の条まで「菊池城院」・「菊池城」としての記載を見る。

古代山城は大化の改新(645年)を皮切りに、朝鮮半島における白村江の戦い(663年)、大津京遷都(667年)と、日本の古代史上で最も激動の時期といわれる7世紀代に大和政権によって九州や瀬戸内海沿岸、大和などに築かれた国防上の重要拠点である。(国書によれば、水城を含めて12ヶ所に築城されているが、今日、所在地が判明しているものは6城にしかすぎない。

西暦 645年	大化元年	・大化の改新。
649年	大化5年	・蘇我日向を筑紫大宰府に任ず。
663年	天智2年	・白村江の戦い。
664年	天智3年	・筑紫などに防人と烽を配置。水城を築く。
665年	天智4年	・筑紫に大野城、基肆城を築く。長門に長門城を築く。
667年	天智6年	・大和に高安城、讃岐に屋島城、対馬に金山城を築く。
698年	文武2年	*『続日本紀』「大宰府をして大野・基肆・鞠智の三城を結び治めしむ」
699年	文武3年	・三野城、稲積城を修繕。
719年	養老3年	・茨城城、常城を停廢。
720年	養老4年	・華人の反乱。
742年	天平14年	・大宰府の廢止。
745年	天平17年	・大宰府の再置。
858年	天安2年	*『文徳実録』「菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る」「又鳴る」(2月) 「肥後國菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る」(6月) 「菊池城の不動倉十一宇火く」(6月)
875年	貞観17年	*『三代実録』「カラスの群れが菊池郡倉舎の葦草をかみ抜く」
879年	元慶3年	*『三代実録』「肥後國菊池城院の兵庫の戸自ら鳴る」
その後、米原長者伝説等で語られる。		

(* : 国史における鞠智城関連記事 注 : 663年に朝鮮半島の百濟が滅亡している)

第1表 鞠智城の歴史

このように鞠智城は重要な遺跡でありながら、永らくその存在が不明のままであったが、昭和に入って、ようやく位置が確定している。昭和34年12月8日付けで、遺跡の一部が「伝鞠智城跡」として県の史跡に指定され、その後、原教育委員会の調査を経て、昭和51年8月24日付けで指定名称が「伝鞠智城跡」から「鞠智城跡」に変更された(指定箇所は長者山礎石群・宮野礎石建物跡と堀切門礎石の3ヶ所)。

鹿本郡菊池町の米原台地を中心域とする鞠智城跡は、米原集落や周辺に広がる農地や谷、崖線などを包み込み、さらにはその南縁で菊池市の一部に掛かる広大な城域である。開田と山林開墾を契機として、昭和42年から本格的調査が開始され、30年近い年月を経た今、ようやくその内容が明らかにされつつある。ちなみに、平成6年度までの16次にわたる調査の中で、古代山城では初めての八角形建物跡(平成3年度・第13次調査)を検出するなど、その特異性が注目されている。さらに、今年度の調査では深道門礎石の谷間から鞠智城跡で初めての版築土壘が検出される等の成果があった。

鞠智城は平安時代には菊池城とも書かれている。「菊池」ではこの時代に「久久知(くくち)」と読まれている。城は当時、「き」と発音されていたので、鞠智城は当時「くくちのき」と称されたものと思われる。しかし、今日、城跡は一般的に「きくちじょう」と呼ばれている。

西暦	年号	発掘調査	その他
1937	昭和12		・故榎本建彦氏が、米原一帯の地形や遺構を調査して、「御智城跡に擬される米原遺跡に就いて」を発表。
1938	昭和13		・故松尾康見氏が調査。米原に標柱を建て、保護籬郭に努める。
1953	昭和28		・九州文化総合研究所が「御智城跡の調査保護計画」を策定。
1956	昭和31		・御智古文化調査団が遺構調査。 ・長者山の礎石列の実測を行う。
1959	昭和34		・長者山礎石群と鎌田門礎石を照の史跡「御智城跡」に指定。
1967	昭和42	・第1・2・3次調査(県教育委員会)	
1968	昭和43	・米原台地の農業施設改善事業(圃田)と長者山の山林樹叢(牛舎跡)に伴う緊急調査。	
1969	昭和44	・第4次調査(県教育委員会)	
		・宮野礎石の露出と長者山礎石群の全面露出。 ・長者山の測量。	
1976	昭和51		・県指定名称を「御智城跡」と改称。
1979	昭和54	・第5次調査(市教育委員会)	
		・町道(立花・種方線)拡幅工事に伴う事前調査。 ・発掘調査で軒丸瓦が出土。	
1980	昭和55	・第6・7次調査(県教育委員会)	
		・文化庁国庫補助事業。 ・第6次では上原地区の一部を発掘。 ・第7次では宮野礎石の全面露出。	
1981	昭和56 昭和57		・宮野礎石を照史跡に追加指定。 ・米原台地の地形図(1/1000)を作成。
1986	昭和61	・第8・9次(県教育委員会)	
1987	昭和62	・文化庁国庫補助事業。 ・第8次調査では航空撮影による米原地区の地形図作成作業。 ・第9次では長者山礎石群調査。北側段落ち区画より多量の炭化米と布片瓦が出土。	
1988	昭和63	・第10次調査(県教育委員会)	
		・文化庁国庫補助事業。 ・宮野礎石周辺及び少弘ドン西側地域の調査。 ・2種の建物跡を検出。	
1989	平成元	・第11次調査(県教育委員会)	
		・文化庁国庫補助事業。 ・宮野地区の集中調査。4棟の建物跡を確認。	・照知事から教育委員会に、県を代表する遺跡の調査を進めるよう指示があり、これに対し御智城を測定。
1990	平成2	・第12次調査(県教育委員会)	
		・文化庁国庫補助事業。 ・照の単独事業としての重要遺跡確認調査も加わって、調査面積が大幅に増大。 ・長者山奥側一部(長者原地区)の調査。	
1991	平成3	・第13次調査(県教育委員会)	
		・継続して文化庁国庫補助事業と照の単独事業による重要遺跡確認調査。 ・町道西側一部(長者原地区)の調査。 ・13年ぶりに軒丸瓦が出土。 ・八角形礎石群と12棟の竪立柱・礎石建物跡を検出。	

第2表 近年の調査の変遷一覧①

西暦	年号	発掘調査	その他
1992	平成4	<ul style="list-style-type: none"> 第14次調査（県教育委員会） 城域を確定するため、土塁線の調査。 町道沿いの下原地区と上原地区を調査。下原地区から、鞠智城の終末期にあたる日置時代の礎石遺跡跡を検出。 	
1993	平成5	<ul style="list-style-type: none"> 第15次調査（県教育委員会） 町道から東側の上原地区を調査。長者原（下原）地区とは対照的に、鞠智城時代の遺構はほとんど検出できなかった。 下に弥生時代の竪穴住居跡を検出。 	<ul style="list-style-type: none"> 県総合計画に歴史公園化を旨とした「鞠智城跡」の調査・整備が盛り込まれる。 保存整備の基本構想策定。
1994	平成6	<ul style="list-style-type: none"> 第16次調査（県教育委員会） 深道門礎石一帯を調査。 原築土塁や竪き石を持つ登城道を検出。 	<ul style="list-style-type: none"> 保存整備のための「鞠智城跡保存整備基本計画策定委員会」が発足。 「鞠智城跡保存整備計画書」を作成。 着鹿町に「鞠智城跡懇話会」が発足。（10月）

*昭和12年以前の事については、久保山善映師著の「鞠智城私見」（昭和6年3月7日）を参照。熊本県文化財調査報告第130集「鞠智城跡」に付録として掲載。

第3表 近年の調査の変遷の一覧②

第Ⅱ章 遺跡の概要

第1節 遺跡の位置

〔1〕鞠智城跡の中心城は熊本郡菊鹿町の米原台地で（城域の9割を菊鹿町が占め、残り1割が菊池市側にかかる）、国土地理院発行2万5千分の1地形図「菊池」によると、城域の一隅を占める米原の長者山は、図幅北から0.5cm、西から14.1cmの所にある。行政域では南と東に菊池市、北に鹿北町（熊本郡）と接している。

菊池川に合流する追間川と木野川に挟まれた南北幅60mの台地の基部にあたるこの一帯は、北東方向8km先に八方ヶ岳（標高1052m）が遠望され、南西方向に広大な菊池平野を望む地形の一大変化地点である。八方ヶ岳の麓に源を発する丘陵地帯の周縁部に鞠智城跡が所在している。

〔2〕丘陵地における米原台地は、上面域で多少の起伏があるものの、周辺の地形が標高90～100mに及ぶので、比高差40～50m程の小高い丘である。この点で、他の古代山城とは地形的に大きく異なっている。



第1図 菊鹿町・菊池市位置図

第2節 鞠智城の城域について

〔1〕築城に際しては、当然の事ながら、かなりの選地がなされている事が明らかである。城が築かれた米原台地は、周辺部を迫地に囲まれた独立地形である上に、南側を除く三方が巨視的に八方ヶ岳山系とその支脈尾根に圍繞されており、まづもって、完全な防禦地形の中にあると言って良い。

一方で、地形的に開口部にあたる南側も、広大に広がる菊池平野とは70m程に及ぶ比高差があり、さらに台地がその間に挟まる所に絶妙の選地がある。ちなみに米原台地との境には、台地を東西に横断する大小の迫地が割まれており、守りをより堅固なものとしている。迫地は南からの攻撃を断ち切る役目を果たす事になる。



第3図 鞠智城の城域図

〔2〕朝鮮式山城の定義に基づき、米原台地の上面域を中心に土塁線一箇線-3つの城門によって圍繞される内城地区が真の城域である。全周約3.7km弱の長さで、約55haの規模となる。なお、全周については基肄城と同一数値である。これについては、菊池城と基肄城が類似の遺跡である事を示すデータとして注目される。これに加えて、西側の大門口と台地の辺縁部を加えた65haの地域を外縁地区と考える必要がある。特に大門口は八方ヶ岳山系とその支脈尾根に圍繞される米原台地との接点(狭い開口部となっている)にあたり、鞠智城にとって最重要地点の一つである。この箇所を防禦(遮断)する事によって、敵方の仮進軍路は城の南面のみにとられる。鞠智城の城域に外縁地区を加える必要性はここにある。

従って、鞠智城は内城地区で55ha、これに65haの外縁地区を加えて、総面積120haの古代山城という事になる。

第3節 鞠智城の築城時期と築城者

鞠智城の築城時期についての記録は無い。しかし『日本書紀』天智天皇四年(665年)秋八月の条に、百濟の下族出身で祖国を失い日本に亡命してきた連率(官位名)憶礼福留(おくりいふくりゅう)と四比福夫(しひふくふ)の指導によって、筑紫国の大野城と基肄城の二城が築かれたとの記述がある。したがって、これらの二城とともに33年後になって修治する必要が生じた鞠智城も、同一時期に、憶礼福留らの渡来人に築かれた可能性が高い。

第4節 鞠智城の門礎石について

〔1〕現在、鞠智城には3箇所に門礎石が残っている。今回、発掘調査を行った東南方向の通称(以下同じ)深迫門と南方向(中央部)の堀切門、さらには西方向の池の尾門である。

〔2〕堀切門は正門としての認識がなされている。そもそも大宰府と肥後を結ぶ古代の幹道は、現在の九州縦貫自動車道沿いに南下しており、菊水インター付近からは東進に転じて、山鹿市、鹿木町、菊池市の限府を通過したのち、再び南下に転じ、肥後の国府に至るコースをとる。ちなみに菊池の限府から鞠智城への枝道があり、これが堀切門に直結するとされる。堀切門が正門とされる由縁はここにある。門の扉は一つの礎石を利用した観音開きであるが、今は対になる先端部のほぞ穴箇所が欠けている(欠損部は城下の堀切・木野神社に運び込まれている)。

凹道内にある本体部分の門礎石は、ほぞ穴の向きから、本来横向きであるはずのものが、90度回転して縦向きになっている事になる。門礎石は扁平な岩が利用されており、上面は平らに加丁されている。

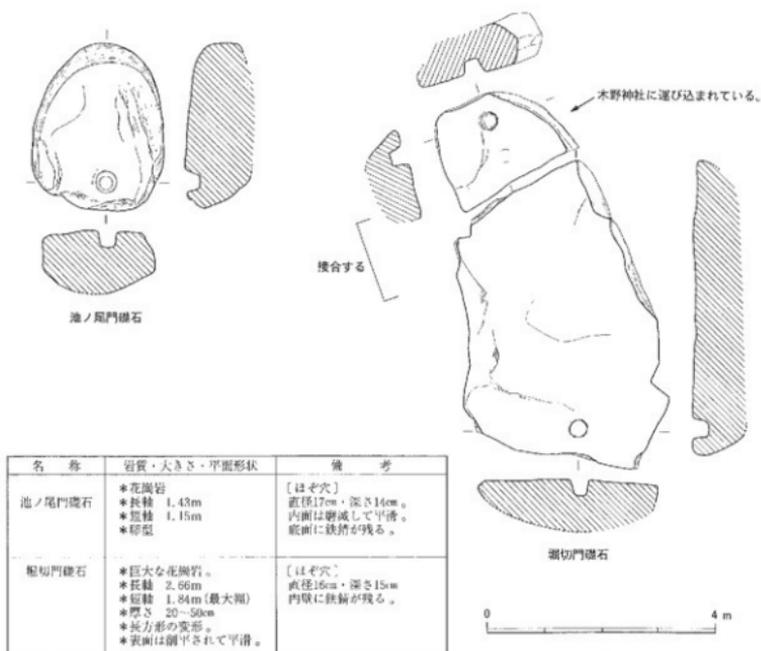
移動しているものの地形的には門礎の位置にふさわしい所である。ほどない所に原位置があるものと思われる。但し、登城道は土砂崩れの影響もあり、よく分からない。

〔3〕池の尾門は谷頭の前から開口部の西へ向う帯状形の迫内にある。周辺地形から見れば、本体部分の台地は南坡で、一旦、小さな崖線を形成し、裾部に迫を持つ。さらに、迫の南壁は土塁状を呈する地形の高まりがあり、最終的には、この地形の南縁が大きな崖線を形成することになる。したがって、池の尾門は鞠智城が取り込む迫地内に位置していることがわかる。ちなみに、迫が途中で一旦大きく折れる箇所があり、そこに池の尾門礎石がある。土地利用の面では門礎から東側が水田地帯で、西側は崖井川の流れる谷間となり、谷川沿いに山道が西下する。この池の尾門礎石を地図で見ると、丁度、米原台地北側の土塁線が迫へ下りおりた所にある。門礎の位置として、申し分のない所である。そこで、この線を機械的に前述の迫の南壁を形成する土塁状地形に押し上げれば、鞠智城の城域線が成立する。

しかし、問題も残される。門礎箇所は前述のように大きく括れるとは言え、それでも対岸とは十数mの間隔があり、間には谷川が流れている。さらに門礎石自体は谷川に落ち込んだ状態にある。周囲の地形状況からして余り移動していないものと見るが、昭和40年代の調査結果にもある様に、原位置をとどめていない事は確かである。これらの事柄が気にかかる。場所的には水門が想定されるが、地形的にひとたび大雨降れば上流域からの水が押し寄せる危険性があり、崩壊の恐れが大きいと見る。なお、他の2つの門礎石とは形態が異なり、全体的に小振りで加工の度合いも低い。使用された岩石は丸味を帯びて立体感がある。ほぞ穴は一つである。

〔4〕 深迫門は、惣智城の東南方向にある。池の尾門礎箇所と共に昭和43年頃にトレンナ調査がなされている。この場合、問題となるのは門礎につながる古道を設定できない事で、存在理由が問われる門礎でもある。

門礎石は、堀切門と同じく扁平な岩が使用されており、上面は加工されて平らである。谷部の階段状地形の中にあり、門礎石自体は北側が浮き上がり南側に傾いた斜めの状態にある。原位置を保っているか否かは議論の分かれるところで、先年の調査では、傾いているものの原位置を移動していないとの推論がなされている。ほぞ穴は一つで、この地点についても、先年の調査で対応する門礎石の抜き取り穴が想定され、観音開きの扉との解釈がなされている。



名 称	材質・大きさ・平面形状	備 考
池ノ尾門礎石	<ul style="list-style-type: none"> *花崗岩 *長軸 1.43m *短軸 1.15m *卵型 	<ul style="list-style-type: none"> 〔ほぞ穴〕 直径17cm・深さ14cm。 内面は磨成して平滑。 底面に鉄錆が残る。
堀切門礎石	<ul style="list-style-type: none"> *巨大な花崗岩。 *長軸 2.66m *短軸 1.84m(最大幅) *厚さ 20～50cm *長方形の変形。 *表面は磨平されて平滑。 	<ul style="list-style-type: none"> 〔ほぞ穴〕 直径16cm・深さ15cm 内面に鉄錆が残る。

第4表 門礎石観察表

*熊本県文化財調査報告第59集「惣智城跡」よりFig.3, 5, 6を再トレスしたもの。
*深迫門礎実測図はP. 16

第4図 門礎石実測図

[5] 問題はさらに山積みされている。その一つは、これら3つの門礎が城内の道とどのようにつながるかという事である。もっとも短絡的な考え方は、3つとも城の東南側で、今の農道を使って集結し、通称「馬こかし」の狭い通路を経て町道に至るという推論である。もっとも現況に則した考えであるが、今後の調査で大きく変わる事が予想される。



第5図 鞠智城内城地区地形図

1-55は縮出資料

第三章 調査の成果

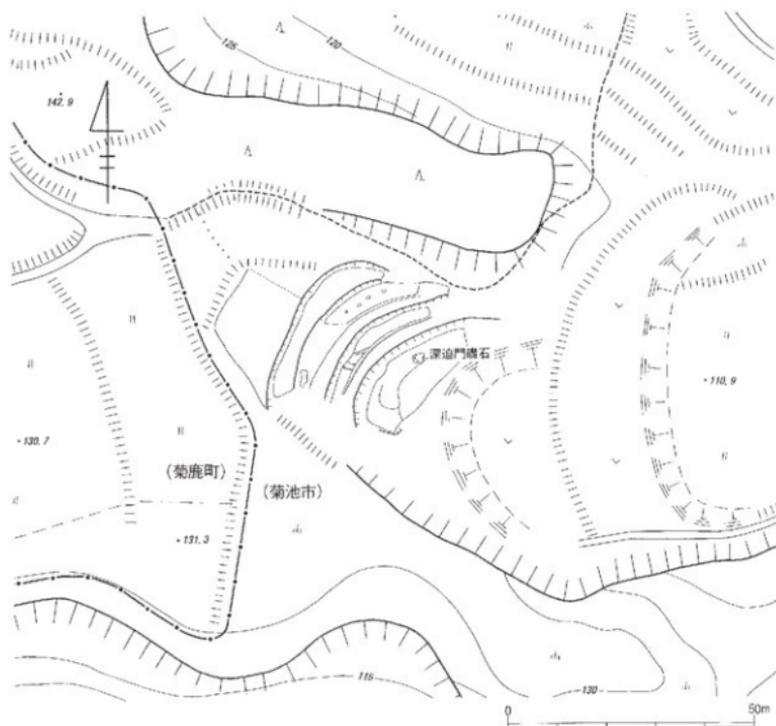
第1節 深迫門礎石周辺調査区

西北西側に谷頭を有し、東南東側へ下る谷間を発掘調査した。前述のように、今日、この谷間は段々畑となっているが、2段目の法面から明確な版築土塁セクションとして捉える事ができた。

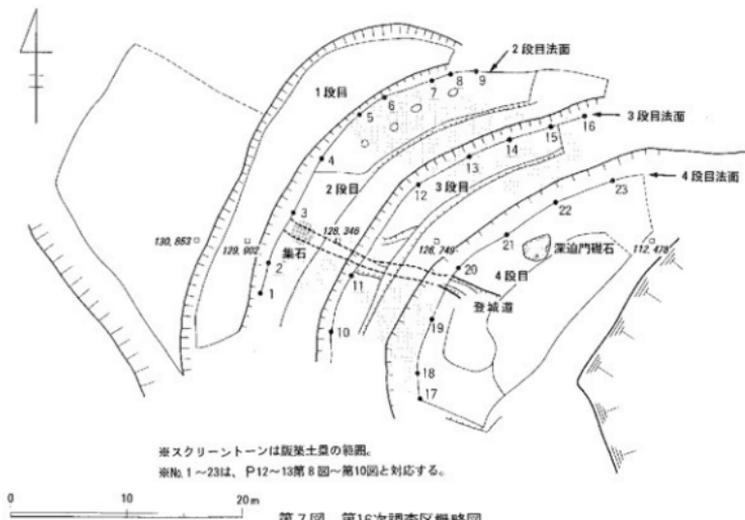
結果として、この谷間には谷底を利用した登城道があり、斜面部においては、南北西側から開口地形の谷部を扶める意味で版築土塁が築かれていた事が判明した。

1段目

谷頭を削平した段々畑である。南側寄りでは上面の幅が0.3~0.4mと極端に狭かったために掘削せず、排土の置場とした。



第6図 第16次調査区周辺地形図(調査初期)



第7図 第16次調査区概略図

2段目

①上面

〔集石〕

谷部近くから集石が検出された(集石①)。東西の長さ2.6m、南北の幅2.4mの範囲から、谷部を埋める堆積土の最下部近くからである。このあたりに粘土質の黒褐色土が帯状に堆積しており、集石はここから検出された。検出当初は、この集石について登城道の敷石もしくは門礎石の根固め石とも考えたが、結果として、谷底の直上に堆積した土に混じり込んだものであると判断した。即ち、集石は上位部分からの敷石の流れ込みという事になる。

個々の石は円礫の川原石で、両手平からはみ出すほどの大きさであった。ちなみに、この集石箇所について、東側半分を掘り下げた所、谷底に食い込み原位置を保つ川原石を検出することができた(P.21、第17図に赤で表した)。直径60cm、幅40cm程の楕円形状の掘り込み穴に敷き詰められたものがあり、登城道の敷石であった事がわかる。

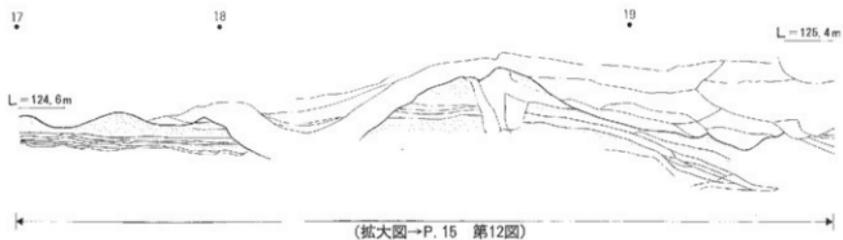
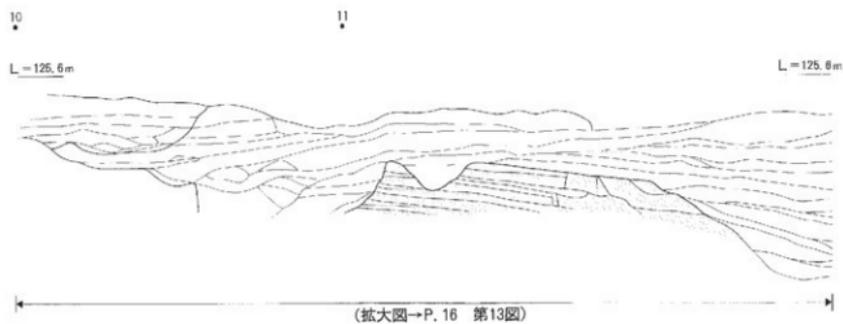
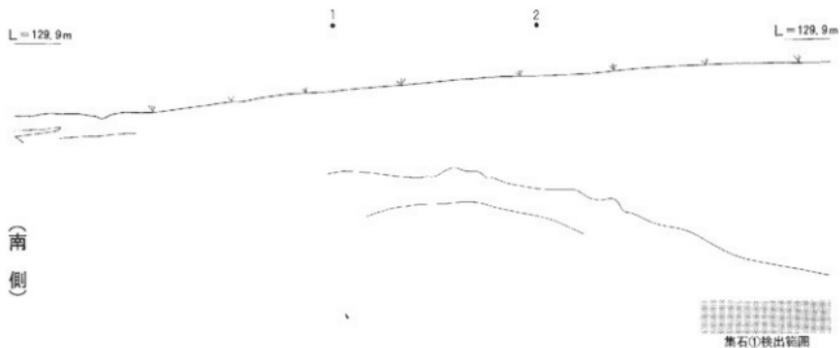
②法面

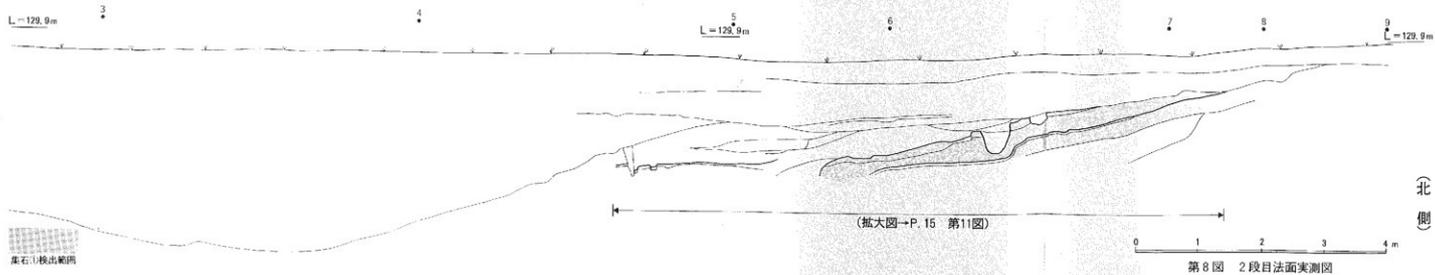
谷底中央部の落ち込みは大きく、最深部では地表から3.2mを測った。以下、法面の状況を説明するにあたっては、谷の中心部を境に北側と南側に分ける。

〔北側〕茶褐色土を強く叩き締めた範囲(長さ10.4m分、層厚は最大0.4m)がある。叩き締めの状態から土塁の基定をなす部分と思われる。北端寄りでは地山に取り付く土塁の先端部が観察できる。

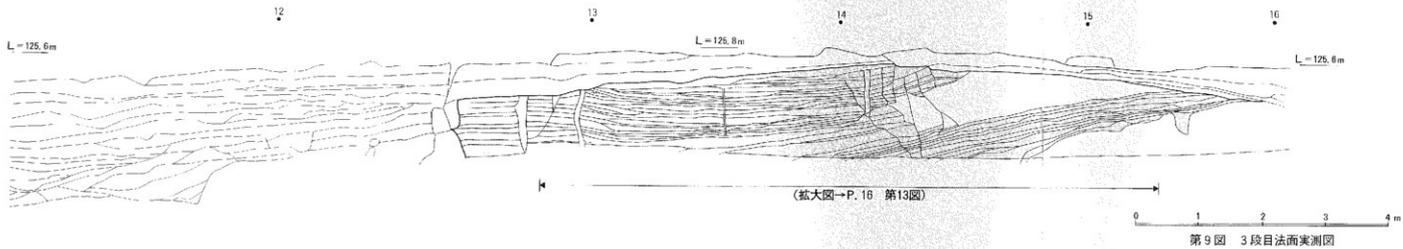
〔南側〕版築土塁は観察できない。搬乱土の下層は地山の桃色ローム層土となる。

③堆積土の土色に際立った違いは無く、廃城後、一気に埋め立てられた事が分かる。谷部の埋土は灰褐色土が基準色で、これは土塁を崩した土ではなく、他からの持ち込みによるものである。

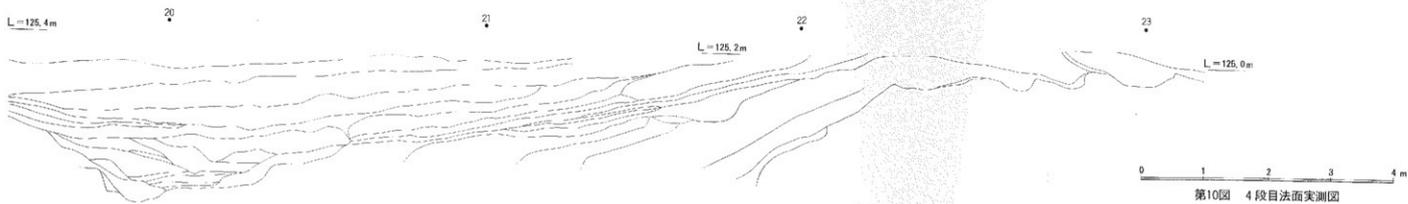




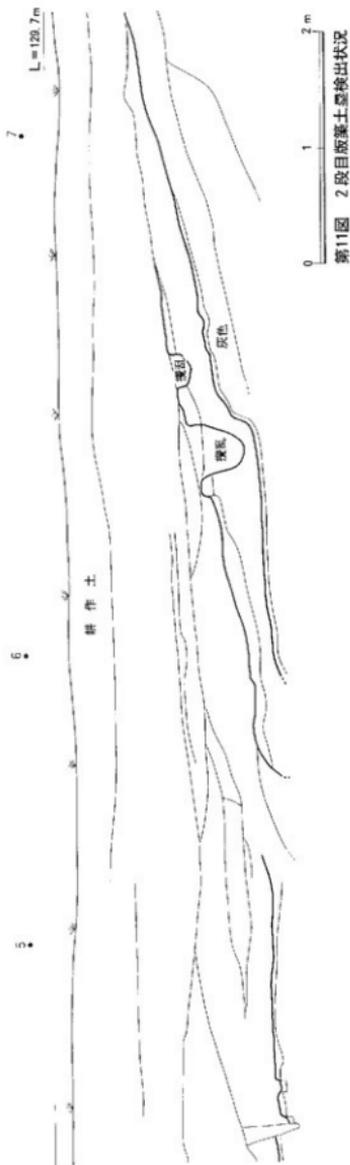
第8図 2段目法面実測図



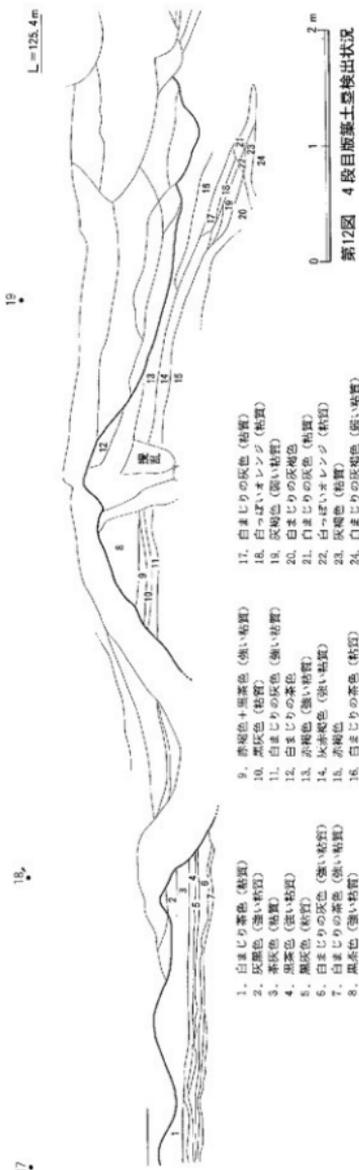
第9図 3段目法面実測図



第10図 4段目法面実測図



第11図 2段目版蕪土壁検出状況



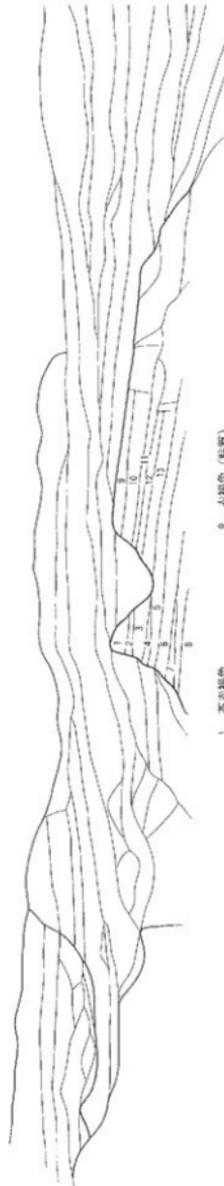
第12図 4段目版蕪土壁検出状況

1. 白まじり茶色 (粘質)
2. 灰褐色 (強い粘質)
3. 赤褐色 (粘質)
4. 赤褐色 (強い粘質)
5. 赤褐色 (粘質)
6. 白まじりの灰色 (強い粘質)
7. 白まじりの茶色 (強い粘質)
8. 灰褐色 (強い粘質)

9. 赤褐色+黒茶色 (強い粘質)
10. 灰褐色 (粘質)
11. 白まじりの灰色 (強い粘質)
12. 白まじりの茶色
13. 赤褐色 (強い粘質)
14. 灰赤褐色 (強い粘質)
15. 赤褐色
16. 白まじりの茶色 (粘質)

17. 白まじりの灰色 (粘質)
18. 白っぽいオレンジ (粘質)
19. 灰褐色 (強い粘質)
20. 白まじりの灰褐色
21. 白まじりの灰色 (粘質)
22. 白っぽいオレンジ (粘質)
23. 灰褐色 (粘質)
24. 白まじりの灰褐色 (強い粘質)

L=125.6m



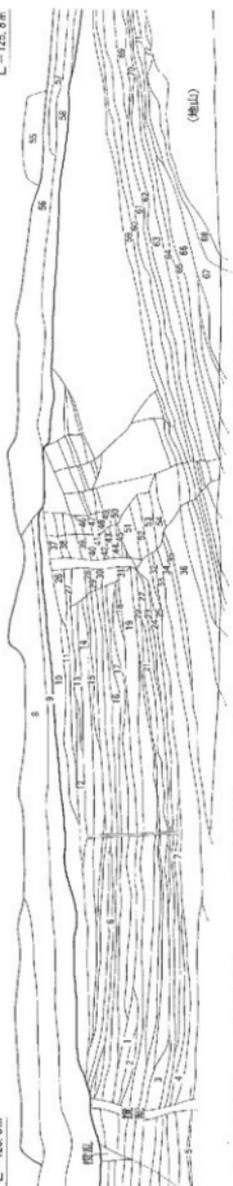
1. 赤赤褐色
2. 黒茶色
3. 黒褐色
4. 黒っぽい赤褐色 (粘質)
5. 黒褐色 (強い粘質)
6. 赤褐色 (強い粘質)
7. 茶色 (粘質)
8. 小礫色 (粘質)
9. 白まじりの茶色 (強い粘質)
10. 赤赤褐色 (粘質)
11. 黒茶色 (粘質)
12. 黒褐色 (強い粘質)
13. 小礫色 (強い粘質)

L=125.6m



13

L=125.8m



15

L=125.8m

1. 赤赤褐色 (強い粘質)
2. 赤褐色 (粘質)
3. 赤褐色 (強い粘質)
4. 赤褐色 (強い粘質)
5. 赤褐色 (粘質)
6. 赤褐色 (粘質)
7. 白まじりの赤褐色 (強い粘質)
8. 赤褐色 (粘質)
9. 赤褐色 (粘質)
10. 赤褐色 (粘質)
11. 赤褐色 (粘質)
12. 白まじりの茶色 (強い粘質)
13. 赤赤褐色 (粘質)
14. 赤褐色 (粘質)
15. 赤褐色 (粘質)
16. 赤褐色 (粘質)
17. 白まじりの赤褐色 (強い粘質)
18. 赤褐色 (粘質)
19. 赤褐色 (粘質)
20. 赤褐色 (粘質)
21. 赤褐色 (粘質)
22. 赤褐色 (粘質)
23. 赤褐色 (粘質)
24. 赤褐色 (粘質)
25. 赤褐色 (粘質)
26. 赤褐色 (粘質)
27. 赤褐色 (粘質)
28. 赤褐色 (粘質)
29. 赤褐色 (粘質)
30. 白まじりの赤褐色 (粘質)
31. 白まじりの赤褐色 (粘質)
32. 赤褐色 (粘質)
33. 赤褐色 (粘質)
34. 赤褐色 (粘質)
35. 赤褐色 (粘質)
36. 赤褐色 (粘質)
37. 赤褐色 (粘質)
38. 赤褐色 (粘質)
39. 赤褐色 (粘質)
40. 赤褐色 (粘質)
41. 白まじりの赤褐色 (強い粘質)
42. 赤褐色 (粘質)
43. 赤褐色 (粘質)
44. 白まじりの赤褐色 (強い粘質)
45. 白まじりの赤褐色 (強い粘質)
46. 赤褐色 (粘質)
47. 赤褐色 (粘質)
48. 赤褐色 (粘質)
49. 赤褐色 (粘質)
50. 赤褐色 (粘質)
51. 赤褐色 (粘質)
52. 赤褐色 (粘質)
53. 赤褐色 (粘質)
54. 赤褐色 (粘質)
55. 赤褐色 (粘質)
56. 赤褐色 (粘質)
57. 赤褐色 (粘質)
58. 赤褐色 (粘質)
59. 赤褐色 (粘質)
60. 赤褐色 (粘質)
61. 赤褐色 (粘質)
62. 赤褐色 (粘質)
63. 赤褐色 (粘質)
64. 赤褐色 (粘質)
65. 赤褐色 (粘質)
66. 赤褐色 (粘質)
67. 赤褐色 (粘質)
68. 赤褐色 (粘質)
69. 赤褐色 (粘質)
70. 赤褐色 (粘質)
71. 赤褐色 (粘質)
72. 赤褐色 (粘質)
73. 赤褐色 (粘質)
74. 赤褐色 (粘質)
75. 赤褐色 (粘質)
76. 赤褐色 (粘質)
77. 赤褐色 (粘質)
78. 赤褐色 (粘質)
79. 赤褐色 (粘質)
80. 赤褐色 (粘質)
81. 赤褐色 (粘質)
82. 赤褐色 (粘質)
83. 赤褐色 (粘質)
84. 赤褐色 (粘質)
85. 赤褐色 (粘質)
86. 赤褐色 (粘質)
87. 赤褐色 (粘質)
88. 赤褐色 (粘質)
89. 赤褐色 (粘質)
90. 赤褐色 (粘質)
91. 赤褐色 (粘質)
92. 赤褐色 (粘質)
93. 赤褐色 (粘質)
94. 赤褐色 (粘質)
95. 赤褐色 (粘質)
96. 赤褐色 (粘質)
97. 赤褐色 (粘質)
98. 赤褐色 (粘質)
99. 赤褐色 (粘質)
100. 赤褐色 (粘質)

81. 白まじりの赤褐色 (強い粘質)
82. 赤褐色 (粘質)
83. 赤褐色 (粘質)
84. 赤褐色 (粘質)
85. 赤褐色 (粘質)
86. 赤褐色 (粘質)
87. 赤褐色 (粘質)
88. 赤褐色 (粘質)
89. 赤褐色 (粘質)
90. 赤褐色 (粘質)
91. 赤褐色 (粘質)
92. 赤褐色 (粘質)
93. 赤褐色 (粘質)
94. 赤褐色 (粘質)
95. 赤褐色 (粘質)
96. 赤褐色 (粘質)
97. 赤褐色 (粘質)
98. 赤褐色 (粘質)
99. 赤褐色 (粘質)
100. 赤褐色 (粘質)



第13図 3段目版築土壁検出状況

3 段目

①上面

表土掘削によって2段目と3段目はつながった。結果として、川原石が敷き詰められた楕円形状の掘り込み穴は7個を数えた。これらは登城道の底部に並んでいた。この内、上段から数えて4つ目から6つ目の穴の間には、段下りに、もう一列の掘り込み穴が検出された。この事により、登城道には千鳥の並びに敷き石が設けられていた事がわかる。

②法面

〔北側〕長さ13m分に明確な版築土塁が残っていた。最大の層厚は1.6mを測り、20層から30層にも及ぶ版築土が積み重ねられていた。版築土は谷部の斜面に沿っており、北側から南側への緩傾斜を有する事になる。個々の版築は層厚10cmも満たないもので、粘土を非常に強く叩き締めたものである。ローム土が利用されており、土色は茶白色、灰茶色、橙褐色、黒茶色など多色に及んだ。北端寄りでは地山の凝灰岩質土に取り付け、土塁の先端部がある。ところでこれより南側部分の長さ4.5m分につき、版築土塁の中位から上位にかけて積み土の分層が可能である。下層部分と南側箇所には、はっきりとした版築土が観察出来るだけに大きな疑問として残る。見方によっては地震によって土塁が大きく揺らぎ、版築土が混じり合う格好になった事も考えられる。

この事に関連して、土塁の北東端から南西側へ8.9mの所に版築上面にヒビ割れのような縦位の細線が観察される。一見すれば細長い樹根とも思えるが、これも地震発生時の液化現象の痕と考えられなくもない。

〔南側〕長さ4.5m、層厚0.6m分に版築土が観察された。この箇所は谷間の斜面に沿って南側から北側への緩傾斜となっている。版築土は黒色と茶色のローム層土をベースにしたものである。

③谷部

底部近くは断面形状が箱掘り状を呈し、横幅も3.5mに狭まる。この谷部の堆積土も灰褐色土をベースにしたもので、分離が難しいが、明色度や硬軟の差異によって線引きを試みた。

4 段目

①上面

〔方形の掘形〕

4段目の南縁に地山を掘り込む方形の掘形が、東西方向で直線的に並んだ6個が検出された。柱間は1.8mと推察される。元来は土塁の基定部にあたる所とも考えられ、その存在はまったく不可解というしか言いようの無いものである。東端の2個については柱穴が残っていた。土塁の縁部に並ぶ柱列の可能性もあろう。

〔集石〕

版築土塁の中から集石が検出された(集石②)。当初は上位からの流れ込みであると考えた。版築土塁の基定部をなす敷石の可能性もある。

〔土壇〕

登城道の周辺から不明土壇が検出された。深辺門礎石から南へ5m離れた所にSK01、その南隣りにSK02、登城道北縁からSK03、その南隣りにSK04の4基が検出された。

SK01は、直径2.3mの円形状のプランである。土壇の埋土は自然堆積で、根石も検出されず、掘り方もはっきりしなかった。

SK02は、やや歪ながら楕円形のプランを持つ、長軸3.5m、短軸2.5mの土壇である。埋土は灰褐色土で近世に掘られたものと思われる。この土壇も掘り方がはっきりしなかった。

SK03は、門礎石の位置としてはふさわしい所であるが、掘り込みは皿状で浅く(30cm程度)、形状も不確かで確定できなかった。

SK04も不確かで確定には至らなかったが、底部から割石列が検出された。

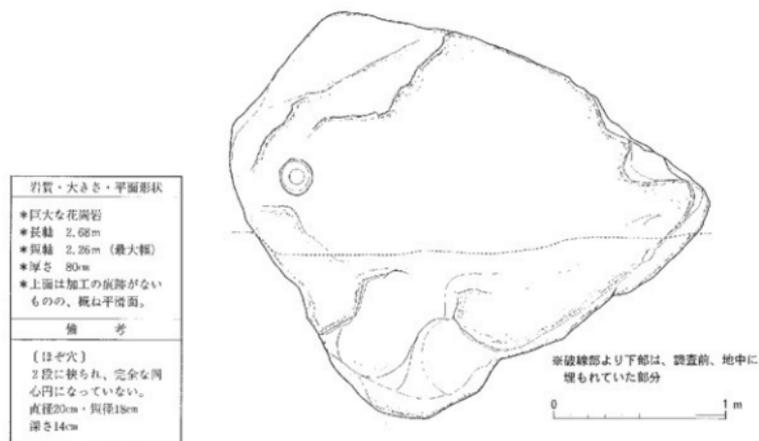
②法面

- 〔北側〕北端では凝灰岩の岩肌に取り付く形で、土塁が築かれている。土色はオリーブ色を基準色としており、全体的にまだら文様が混じる。概して、2段目の法面のようなはっきりとした分層は出来ない。
- 〔南側〕長さ9.5m、分層0.8mに版築土塁が残っている。この土塁は特異で、積み土が左右で大きく違っている。左側は黒色土と灰色土を基調とした完全な版築土塁であるのに対し、右側は茶色ローム層土である。両土塁の境は縦線が入っており、前後関係の点から捕えれば、左側の土塁の一部を削って右側の土塁をくっつけた観があるがはっきりしない。なお、この南側土塁の北端にも版築土のズレがある。

③門礎石

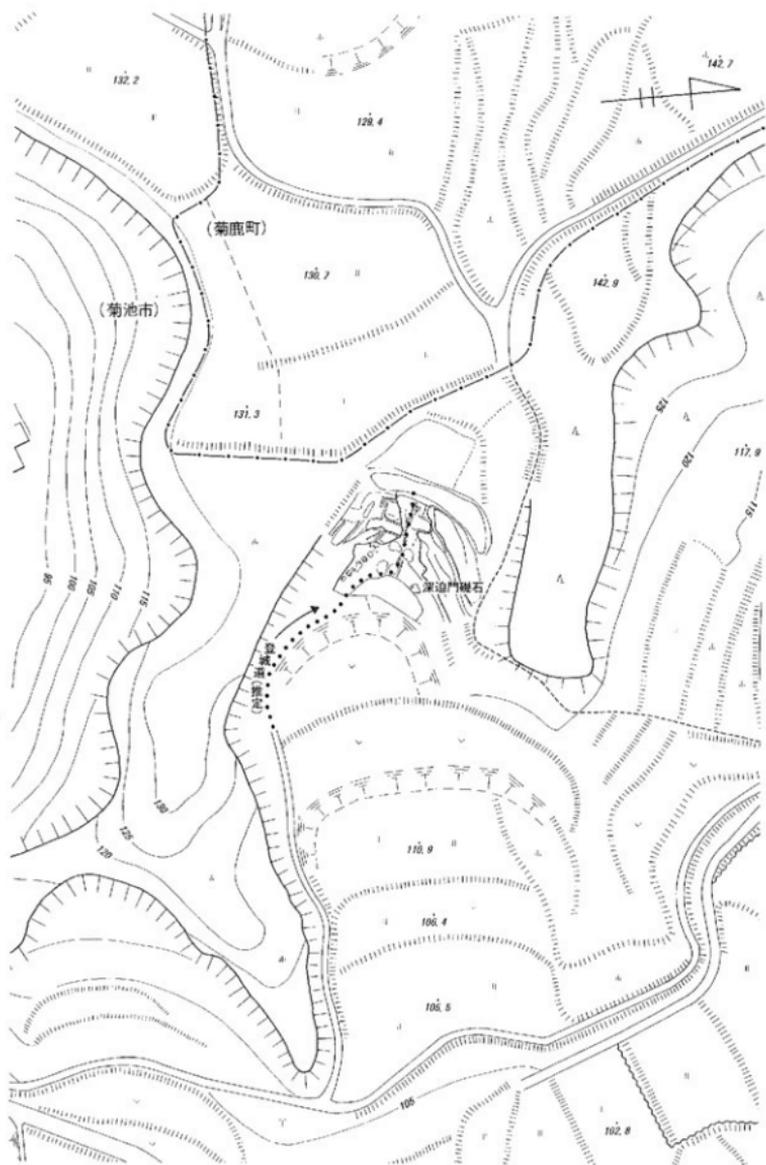
門礎石はあたかも3段目からずり落ちた格好をしていた。谷頭の西北西側が浮き上がり東側へ傾いていたからである。さらに、門礎石は中位から下位にかけて地中に埋没していたため、門礎石の座り方として、かなり特異であった。あたかも俗称どうりの「的石」そのもので、これからすれば、かなり以前からこの様な状態にあったと考える。

今回の調査で、礎石の周辺に掘られたトレンチ(昭和42年度)を再度掘り返したが、目標とした門礎石の原位置は検出されなかった。礎石の底部は地山と接しており、周辺の土塚から版築土や横内め石等は検出されなかった。結果として、この門礎石は原位置を保っていないとの判断をした。

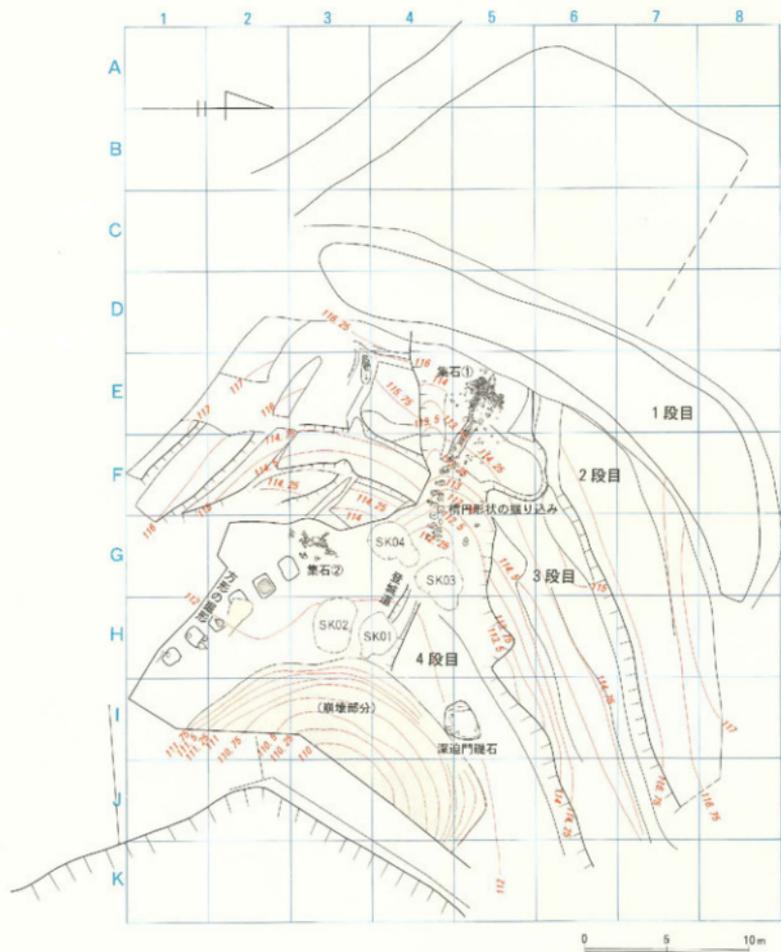


第5表
深泊門礎石観察表

第14図 深泊門礎石実測図



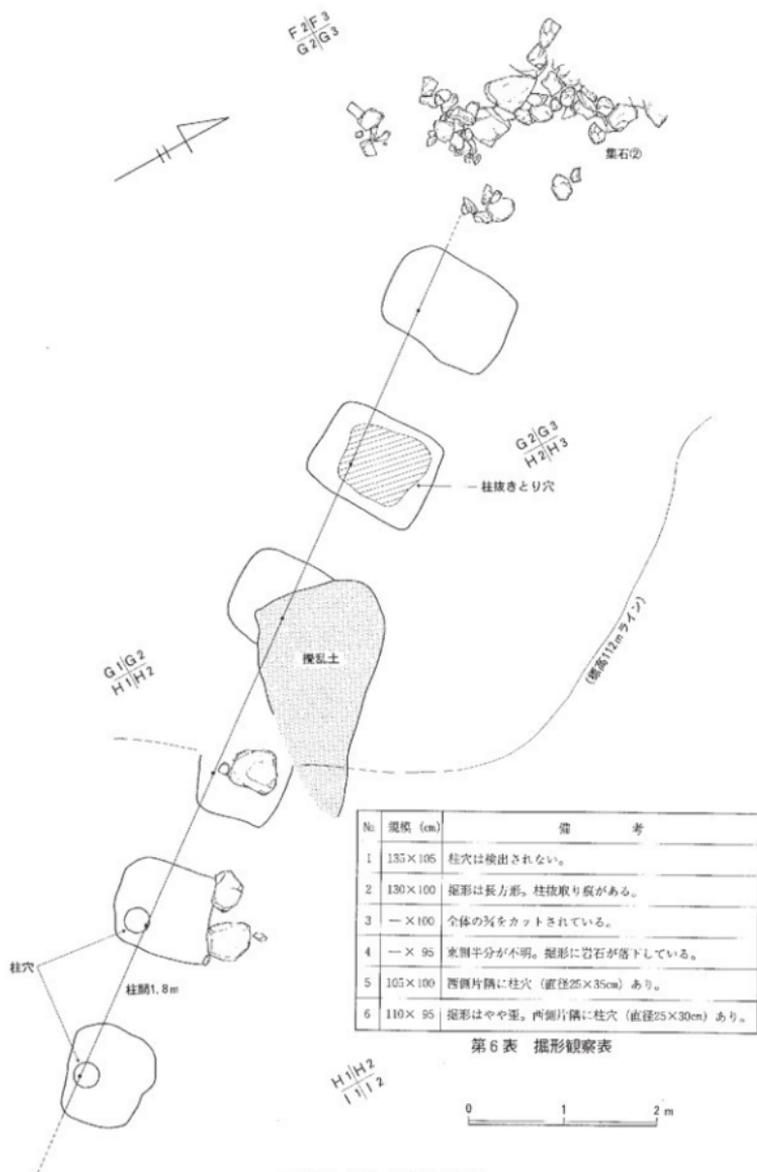
第15図 第16次調査区周辺地形図



第16図 第16次調査区(登城道検出状況)



第17図 集石①・楕円形状の掘り込み実測図



第18図 掘形・集石②実測図

第2節 米原集落周辺調査区

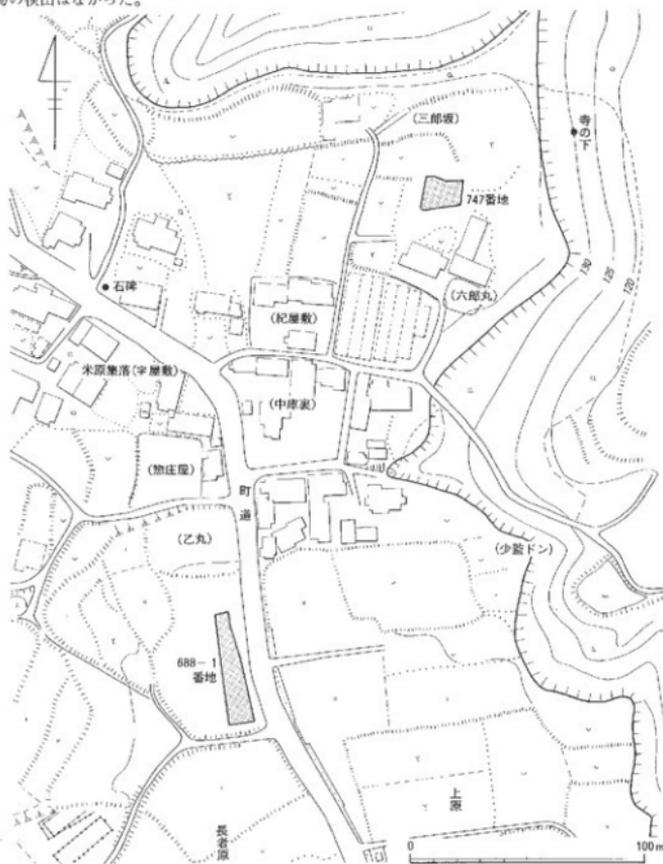
大字米原字屋敷688-1番地、747番地の二箇所を調査した。

[1] 688-1番地は、乙丸に隣接する畑地で、通称「三段せ町」と呼ばれており、元来は3枚の畑であった事がわかる。真実、南北に長い調査区は北側寄りで2つに分かれる。表上は極めて浅く、開田の際に地馴らしたため大幅にカットされている。

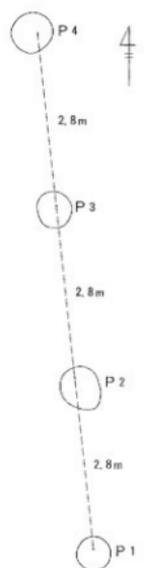
鞠智城時代の柱穴が4個のみ検出された。埴土は黒褐色と褐色ローム土の混入土で固く締まっており、はっきりと線引き出来る。4個とも柱痕は確認できなかった。建物東側の相行か梁行部分の検出(3間分)で、遺構の本体は西側に延びるものと思われる。柱間は2.8m。

その他、凝灰岩の水路、中世代の柱穴が検出された。目立つ遺物の検出は無かった。

[2] 747番地は、紀屋敷・六郎丸・三郎坂に近隣する箇所、南北14m×東西18mの範囲を調査したが、遺構・遺物の検出はなかった。



第19図 調査区周辺地形図



0 1 2m

第21図 柱穴実測図

	長径	短径
P 1	67	63
P 2	60	56
P 3	75	63
P 4	55	55

(cm)

0 5 10m

第20図 688-1 番地調査区

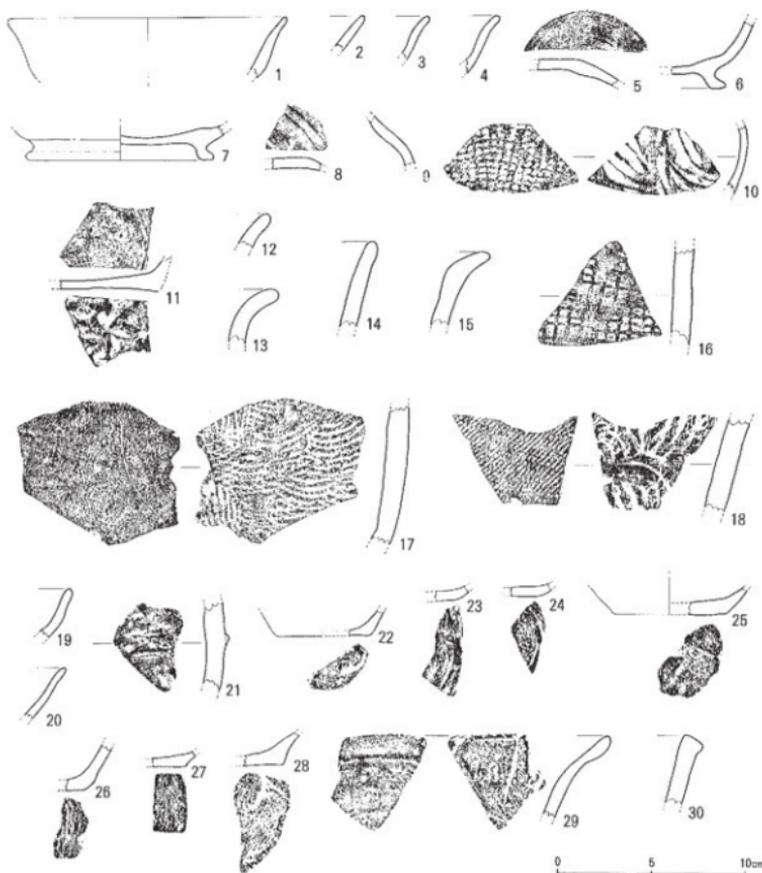
第IV章 出土遺物

出土遺物は、縄文時代・鎌倉時代（12～13世紀）・江戸時代（18～19世紀）の3時代に大別できる。

1～11は須恵器である。6・7は高台付き椀で、同一個体と思われる。12～15は6世紀代の上・中・下・下層の須恵器である。16～18は須恵器の甕。19～28は土師器で、27・28は平安時代のもと思われる。

31～36は青磁である。12～13世紀のもので、32・34は中国の同安窯のものである。37～39は15世紀代の白磁である。

42～53は18～19世紀代のもので、42・44・53は白磁、43・46～52は染付である。42・43・46・49・50・52は肥前系の磁器で、53は肥前・波佐見窯のものである。



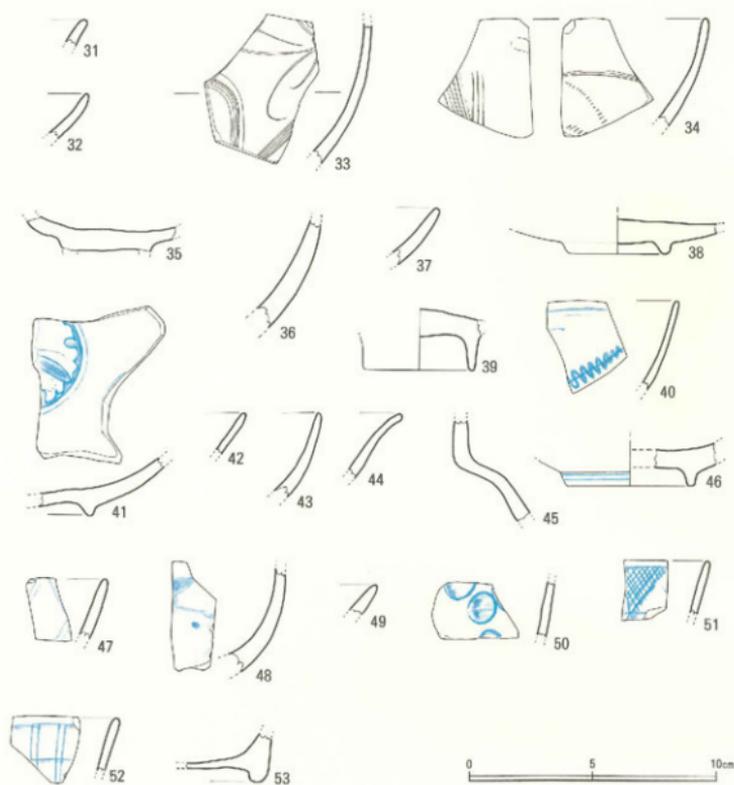
第22図 遺物実測図(1)

№	器種	器厚 (mm)	形 態	調 整	備 考
1	須恵器 (杯)	上位 3.0 中位 5.0 下位 7.0	復元口径 14.6cm 口縁部は外弯する。	回転ナデ。	〔色調〕 灰黒色。 〔胎土〕 白色粒の混入が目立つ。 〔焼成〕 堅緻。
2	須恵器 (杯)	上位 3.5 下位 5.0	口縁部は直線的に伸びる。	_____	〔色調〕 灰(褐色)色。 〔胎土〕 精良。 〔焼成〕 堅緻。
3	須恵器 (杯)	上位 3.5 中位 4.5 下位 4.0	口縁部は外弯する。	回転ナデ。	〔色調〕 灰(褐色)色。 内器面: 灰色。 〔胎土〕 白色粒を混入。
4	須恵器 (杯)	上位 3.5 中位 5.0 下位 5.5	口縁部は外弯する。	回転ナデ。	〔色調〕 灰黒色。 〔胎土〕 白色粒を混入。
5	須恵器 (蓋)	天井 5.5 中位 7.5 下位 4.0	天井部は強いヘラ削りにより扁平。	_____	〔色調〕 外器面: 灰黒色。 内器面: 灰白色。 〔胎土〕 白色粒と雑物を混入。
6	須恵器 (高台付き杯)	〔体部〕 中位 5.0 下位 7.0 〔底部〕 頸部 4.0	高台の芯付きは7mm幅で、大きく湾曲し、外側へ張り出す。 体部は丸味を帯びる。	内底面は強いナデにより、やや窪む。	〔色調〕 灰黒色。 〔胎土〕 白色粒を混入。 〔焼成〕 堅緻。
7	須恵器 (高台付き杯)	〔体部〕 下位 5.5 〔底部〕 中央 4.5 頸部 6.0	復元底径 10.0cm 高台高 9.0cm 高台の芯付きは7mm幅で、大きく湾曲し、外側へ張り出す。	内底面は強いナデにより、やや窪む。	〔色調〕 灰色。 〔胎土〕 白色粒を混入。 〔焼成〕 堅緻。
8	須恵器 (蓋?)	天井 5.5 下位 4.5	_____	_____	〔色調〕 内器面: 灰色。 外器面: 灰白色。
9	須恵器 (蓋)	上位 5.5 中位 5.5 下位 3.5	_____	_____	〔色調〕 灰黒色。 〔胎土〕 白色粒を混入。
10	須恵器	上位 4.0 下位 4.0	_____	内器面は強い円文押。外器面は格子目押し。	〔色調〕 灰黒色。 〔胎土〕 白色粒を混入。
11	須恵器 (碗)	中央 4.5 頸部 9.0	外底面は内凹が目立つ。	_____	〔色調〕 内器面: 黒灰色。 外器面: 灰色。
12	土師器 6C代	上位 6.5 下位 7.5	口縁部は大きく外弯する。	_____	内器面にススが付着する。 〔色調〕 鈍い褐色。 〔胎土〕 白色粒と雑物を混入。 〔焼成〕 良好。
13	土師器 6C代	上位 7.0 中位 7.5 下位 9.0	口縁部は大きく外弯する。	_____	内器面にススが付着する。 〔色調〕 鈍い褐色。 〔胎土〕 精良。 〔焼成〕 良好。
14	土師器	上位 7.0 中位 9.0 下位 9.0	口縁部はやや外弯する。	ローリングが激しい。	〔色調〕 茶褐色。 〔胎土〕 雑物を混入。 〔焼成〕 普通。
15	土師器 6C代	上位 6.5 中位 11.5 下位 8.5	口縁部は大きく外弯する。	内器面はヘラ削り。	内器面にススが付着する。 〔色調〕 外器面: 褐色色。 〔胎土〕 白色粒を混入。 〔焼成〕 堅緻。
16	須恵器	上位 9.5 中位 10.0 下位 10.5	_____	外器面に格子目押し。	〔焼成〕 非常に堅緻。 〔色調〕 外器面: 灰白色。 内器面: 灰色。
17	須恵器	上位 11.5 中位 12.0 下位 9.0	_____	内器面は円文押し。 外器面はナデ。	灰黄色の小窪点が内器面を覆う。 〔色調〕 外器面: 黒灰色。
18	須恵器 (蓋)	上位 11.0 中位 11.5 下位 11.0	器厚は肉太。	内器面は円文押し。 外器面は平。	〔色調〕 外器面: 灰色。 内器面: 灰白色。
19	土師器 (余切り?)	上位 4.5 中位 5.5 下位 5.0	やや内弯する。	ローリングが激しい。	〔色調〕 鈍い褐色。 〔胎土〕 精良。 〔焼成〕 やや甘い。

第7表 遺物観察表①

No	器 位	器 厚 (mm)	形 態	調 整	備 考
20	土師器 (糸切り?)	上位 3.5 中位 3.5 下位 4.5	口縁部はやや外弯する。	丁寧な横ナデ。	〔色調〕 褐色。 〔胎土〕 精良。 〔焼成〕 やや甘い。
21	土師系土器	上位 10.0 尖部部13.0 下位 9.5	胴部に貼り付け突起が付く。	ローリングが激しい。	〔色調〕 褐色。 外器面のみ、部分的に黒灰色。 〔胎土〕 精良。 〔焼成〕 普通。
22	土師器 (糸切り?)	〔体部〕 下位 3.5 〔底部〕 頸部 6.0	_____	ローリングが激しい。	〔色調〕 純白色。 〔胎土〕 精良。 〔焼成〕 やや甘い。
23	土師器 (糸切り?)	〔体部〕 下位 4.5 〔底部〕 頸部 3.5	_____	_____	〔色調〕 外器面：灰色。 内器面：明褐色。 〔胎土〕 精良。 〔焼成〕 堅緻。
24	土師器 (糸切り?)	〔底部〕 中央 5.0	外底端は、しゃげている。	ローリングが激しい。	〔色調〕 鈍い棕色。 外底端は灰白色。 〔胎土〕 精良。 〔焼成〕 堅緻。
25	土師器 (糸切り?)	〔体部〕 下位 3.0 〔底部〕 中央 7.0 頸部 9.0	_____	ローリングが激しいが、外底面は糸切りと思われる。外底端は多少しゃげている。	〔色調〕 鈍い棕色。 〔胎土〕 疵物が混入。 〔焼成〕 普通。
26	土師器 (糸切り?)	〔体部〕 下位 5.0 〔底部〕 頸部 6.0	_____	ローリングが激しい。	〔色調〕 鈍い棕色。 〔胎土〕 白色粒を混入。 〔焼成〕 良好。
27	土師器 平安時代?	〔体部〕 下位 3.5 〔底部〕 頸部 4.5	外底端は、ややしゃげている。	_____	〔色調〕 赤褐色。 〔胎土〕 精良。 〔焼成〕 堅緻。
28	土師器 平安時代?	〔体部〕 下位 3.5 〔底部〕 中央 5.5 頸部 8.5	外底端は肥厚する。 外底は平底?	内器面に丹塗り? ローリングが激しい。	〔色調〕 鈍い棕色。 〔胎土〕 疵物が混入。 〔焼成〕 甘い。
29	赤生土器	上位 5.0 中位 6.0 下位 6.5	頸部は大々く外弯する。	ローリングが激しい。	〔色調〕 黄白色。 〔胎土〕 精良。 〔焼成〕 甘い。
30	土師器	上位 11.0 中位 9.0 下位 9.0	口唇部は扁平(10mm幅)で、斜めに傾むく。	ローリングが激しい。	〔色調〕 明褐色。 〔胎土〕 精良。 〔焼成〕 普通。
31	青 磁 (碗) 12C~13C	上位 3.5 下位 4.0	口縁部はやや外弯する。	外器面に帯描文。	〔釉色〕 オリーブ灰色。
32	青 磁 (碗) 同安室 12C~13C	上位 3.0 下位 4.0	体部は内弯する。	内器面に帯描文。	〔釉色〕 灰白オリーブ色。
33	青 磁 (碗)	上位 3.0 中位 4.0	_____	内器面に帯描文様。	〔釉色〕 灰オリーブ色。
34	青 磁 (碗) 同安室 12C~13C	上位 3.0 中位 3.0 下位 5.0	体部はやや内弯する。	外器面に帯描文。	〔色調〕 灰黄オリーブ色。
35	青 磁 (碗) 12C~13C	〔体部〕 下位 6.0 〔底部〕 中央 8.0 頸部 8.5	_____	_____	〔胎土〕 精良。 〔釉色〕 薄コバルトブルー。 〔植付〕 外底面は無釉。

第 8 表 遺物観察表②



第23図 遺物実測図②

№	器種	器厚 (mm)	形態	調整	備考
36	青磁 (碗)	上位 5.0 中位 8.0 12C~13C 下位 8.5	胴部は内湾する。	外器面に竊蓮弁文様。	灰黄色の小斑点が器面全体を覆っている。 〔釉色〕 灰オリーブ色。
37	白磁 (皿)	上位 3.0 15C 下位 5.5	_____	外器面に絞線。	細かい貫入が入る。 〔釉色〕 灰白色。 〔施華〕 外器面の中位から下位にかけて 無施。
38	白磁 (皿)	〔体部〕 下位 4.5 15C 〔底部〕 中央 10.0	復元底径 4.0cm	外底面中央に指頭形痕。	内底面に貫入が走る。 〔釉色〕 灰白色。 〔施華〕 内底面と外器面の上位~中位まで 施施。 〔胎土〕 褐白色。

第9表 遺物観察表③

No.	器種	器厚 (mm)	形 態	調 整	備 考
39	白 瓶 (瓶香) 15C	天井 11.0 下位 8.5	復元口径 4.5cm 高台高 15.0mm		〔筒色〕 白色。 〔胎土〕 精良。 蓋部は灰色と黒灰色。
40	染 付 (瓶) 16C前～中	上位 2.5 中位 2.0 下位 3.5		外器面に2条の帯線と波状文様。 内器面に不鮮明な1条の帯線。	〔呉須色〕 青黒色。
41	染 付 (皿) 17C中葉	〔体部〕 中位 4.5 下位 7.5 〔底部〕 端部 5.0	高台は扁平。	内底面に三方銀杏割りの文様。	〔呉須色〕 青黒色。
42	白 磁 (碗) 肥前系 18C	上位 3.0 下位 3.0			
43	染付? (碗) 肥前系 18C	上位 3.0 中位 3.5 下位 5.0	体部は内弯する。		
44	白 磁 (碗) 18C末 ～幕末	上位 3.0 中位 3.5 下位 4.5	波口径縁。 口径部は大きく外弯する。		
45	陶 器 (甕) 18C	上位 6.0 中位 4.5 下位 6.0			白化粘土の上に鉄分釉(褐色)をかけ、さらに透明釉をかけて仕上げている。
46	染 付 (碗) 肥前系 18C	〔体部〕 下位 8.0 〔底部〕 端部 7.0 上位 6.0	復元口径 5.2cm 高台高 7.0mm	高台外器面に2条の帯線。 外底面に1条の帯線。 内底面と外器面に文様。	〔呉須色〕 灰緑色。
47	染 付 (碗) 18C中～末	上位 3.0 下位 4.5		外器面に網目文。	〔呉須色〕 灰白青色。
48	染 付 (碗) 18C中～末	上位 4.0 中位 6.5 下位 8.0	体部は内弯する。	外器面に文様。	〔呉須色〕 灰白黒色。
49	染 付 (皿) 肥前系 18C後半	上位 2.5 下位 5.0		内器面に文様。	器面全体は黄灰色で覆われている。 〔呉須色〕 黒灰色。
50	染 付 (肥前) 18C後～幕末	上位 3.5 下位 3.5		外器面に円文。	〔呉須色〕 青黒色。
51	染 付 (湯呑) 18C後半 ～19C初	上位 3.0 下位 3.0	瓶型の湯呑。	外器面に網目文。 内器面に2条の帯線。	〔呉須色〕 緑灰色。
52	染 付 (碗) 肥前系 1820年 ～1860年	上位 4.0 下位 3.5		外器面に格子目文。 内器面上位に2条の帯線。	〔呉須色〕 灰緑色。
53	白 磁 (瓶) 肥前産 (佐佐見) 19C	〔体部〕 下位 7.0 〔底部〕 中央 2.0 端部 6.0	高台は削り出し。 底部は薄壁。		〔胎土〕 内器面は無釉。

第10表 遺物観察表④

第V章 ま と め

〔1〕第16次の発掘調査は深迫門礎石を中心に行った。調査の結果、判明した事柄は次の通りである。

①「的石」と呼ばれている深迫の門礎石は原位置にないと判断した。ちなみに、門礎石の周辺部は、昭和43年にトレンチ調査がなされており、今回、規模を拡大して、再調査となった。

結果として、検出された登城道が完全にずれた位置にあり、現在地において門礎石に関連した根固め石や掘り込みの地業穴も無く、斜めになった門礎石は地山に掘られた穴へ直に落ち込んでいる事がわかった。穴の埋土は明らかに擾乱土である。この事から、門礎石は後世に、今の場所へ運び込まれたものが、さらにその後、耕作のため、半分を地中へ落とし込んだものと判明した。

礎石の裾部を掘り込んで地中に埋没させるやり方（耕作の障害になるという理由で）は、城跡地の米原地区で一般的に行われており（これまでの発掘調査で、いくつかの事例があった）、深迫の門礎石もこの例にならったものと思われる。

②登城道は敷き石を伴うものであったが、調査区の下段部が大きく落盤していたため、一部分の検出に止まった。

この道については、調査区の下区域に今も残る小さな踏み分け道に繋がる事が予想され、上部域は墨切門礎と馬こかしの石垣とを結んでいる農道と通じている事が明らかである。現地で、小田富士雄教授（福岡大学人文学部）が指摘された事であるが「深迫門礎の登城道は、どう考えても鞠智城の正門と目される堀切門礎道の迂回路である」という意見をもっともな事と受け取った。

③深迫の谷間で南北両側から積み上げられた版築土塁を検出することができた。版築土塁の検出は16次にわたる鞠智城調査の中でも初めての事であった。鞠智城跡における土塁線の版築は、これまで地山の削り出しによるものの方が非常に強かっただけに、大きな驚きであった。深迫門礎における版築土塁は谷間を狭めるために積み上げられたもので、土塁間のすき間を登城道が上る事になる。版築土塁の層厚は谷間の斜面・中央部がもっとも厚くなっているが、これは地形に則したものである。

④版築土塁の土層セクションに版築土のズレがあり、それはあたかも、上下から何らかの強い力が加わってズレ落ちた様に受け取れる。見方によっては地震で生じた断層の様で、極めて興味深い。さらに、関連事項として噴射現象のような砂の詰まった縦位の地割れ箇所もあり、今後に検討の余地を残している。

⑤谷部の南側から検出された方形の掘形も注目される。うち2個は柱穴を伴っており、柱間隔は1.8mである事がわかる。これにより、登城道の南縁に並ぶ杭列が予想される（版築土塁の裾部に杭が打たれている事になる）。

⑥深迫門礎の扉は形状で見る限り、片開きの可能性もある。ここで深迫門礎石は堀切門礎石とはほぼ同一の大きさである事を特筆したい。堀切門礎石の場合、両端に「ほぞ穴」がついており、明らかに1個の門礎石を使った「観音開き」の扉である。対して、同じ大きさの深迫門礎石は1個しかほぞ穴がないので、片開きの扉といっても不自然ではない。

⑦登城道の周囲から4個の土塊が検出されたが、いずれも門礎石の地業穴として確定に至らなかった。4個分につき、その内容は下記の通りである。

〔SK01〕 昭和43年の調査時、門礎石は原位置を保つものとされ、これに対応する門礎石に関連した地業穴との見方がされてきた（この時点で、深迫門礎は観音開きとの解釈であった）。当時の調査で土塊は半載されており、これを再度調査した。結果として、土塊自体は壁面が大きくオーバーハングしており、はっきりとした掘り方でない事が判明した。粗土も自然堆積で版築状態になかった。

〔SK02〕 SK01の南側隣りから検出された土塚である。埋土は灰褐色上で近世に掘られたものと思われる。この土塚も掘り方がはっきりしなかった。

〔SK03〕 登城道の北縁から検出されたものである。深迫門礎石の原位置にふさわしい所にあるが、この土塚は皿状の掘り方で、底面がはっきりしなかった。形状もいまは不確かであった。

〔SK04〕 SK03に対応する位置から検出された。埋土を半裁したところ、層厚20～30cm下から割り石列が検出された。この事により版築土塁の下層部に割り石列の存在が判明した。この土塚も確定に至らなかった。

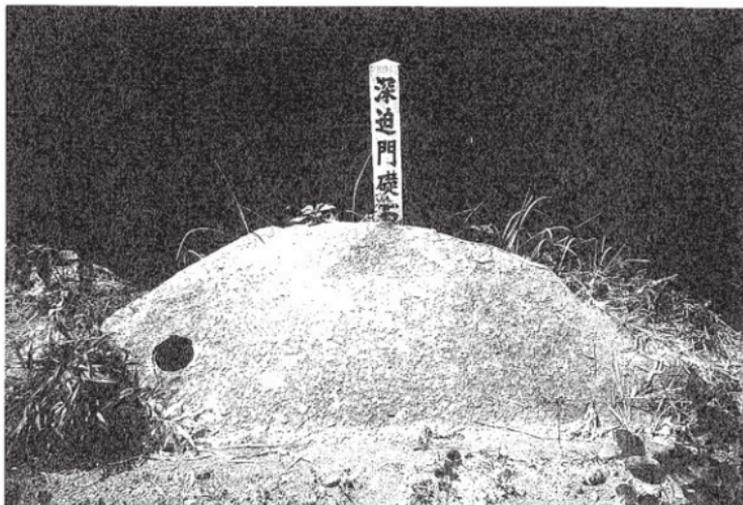
今回の調査では、門礎石の原位置を確定する事ができなかった。検出された4個の土塚は、いずれも、門礎石の地乗穴として疑問視される。現場担当者の所見としては、門礎石の原位置は、調査区より上位箇所にあると見る。地形的には、地形の変化点となる谷頭あたりが候補地となろう。

⑧出土遺物は3時代に大別できる。鞠智城時代と、12～13世紀の鎌倉時代、18～19世紀の江戸時代である。この事により、鎌倉時代に一旦、この深迫門礎の谷間が人為的に埋め戻された後は、江戸時代の後半に今の段々畑に開墾されたことがわかる。鎌倉時代の埋め戻しについては、この時代に鞠智城の跡地が中世城として利用されていた事を意味している。谷部の埋め戻しは崖線の形成にはかならない。

〔2〕今回、初めて集落内に調査区を設定した。米原集落の北東域にあたる所。民家の跡地である。結果として表土を剥ぐとローム土の地山が露呈し、後世にかなりの削平を受けている事がわかった。遺構は検出されなかった。

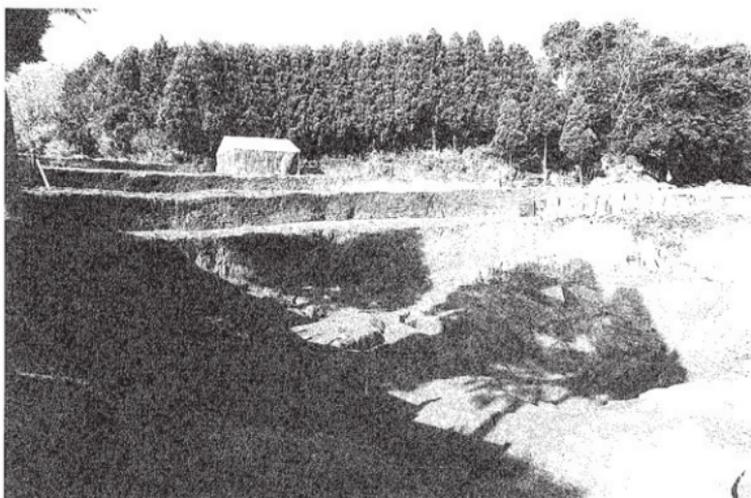
〔3〕通称「三段せ町」の畑地を調査した。今日、集落と耕作地との境目をなす高台である。4個の掘形(小型)を検出した。

写 真 图 版



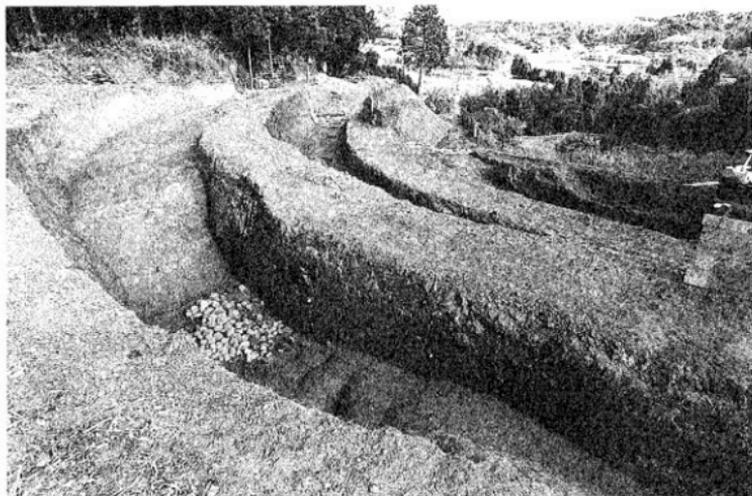
図版1 深迫門礎石 調査前の状態

このように、門礎石は傾斜し、中位から下位にかけて地中に埋もれていた。左隅にはぞ穴があるところから、地元では、これを弓の「的石」に見立てていた。



図版2 調査区を4段目から望む

谷部斜面の両脇から版築土塁が積まれており、その間を登城道が通じている。



図版3 調査区を西側から望む

登城道の上層堆積土から検出された紫石である。最終的に登城道の敷き石が後世に上流域から流れ出して、この箇所に乗ったとの判断をした。



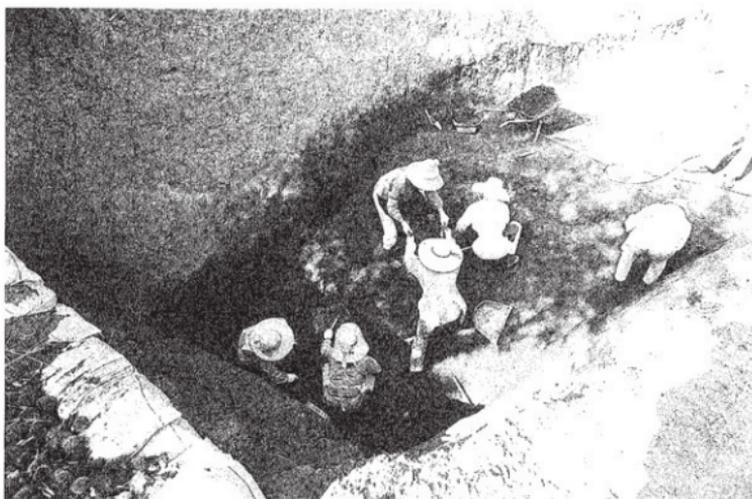
図版4 調査区を東側から望む

右側上段面に写る穴は地権者が桑木を植栽する際に掘ったもので、重構とは無関係。



図版5 調査区の3段目を東側から望む

方形の穴は、前述した桑木の植栽穴である。3段目に見る凹凸の小穴は、版築土量が各所で、後世に侵食されている事を示す。

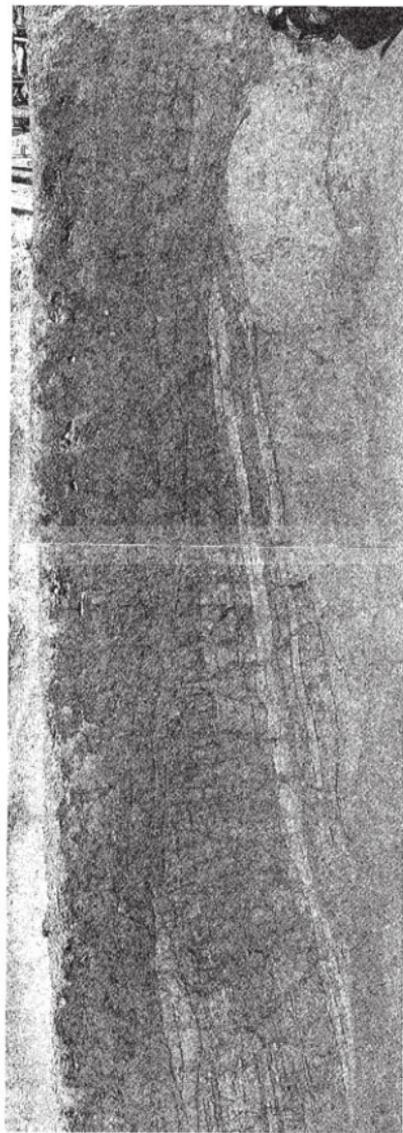


図版6 発掘調査風景

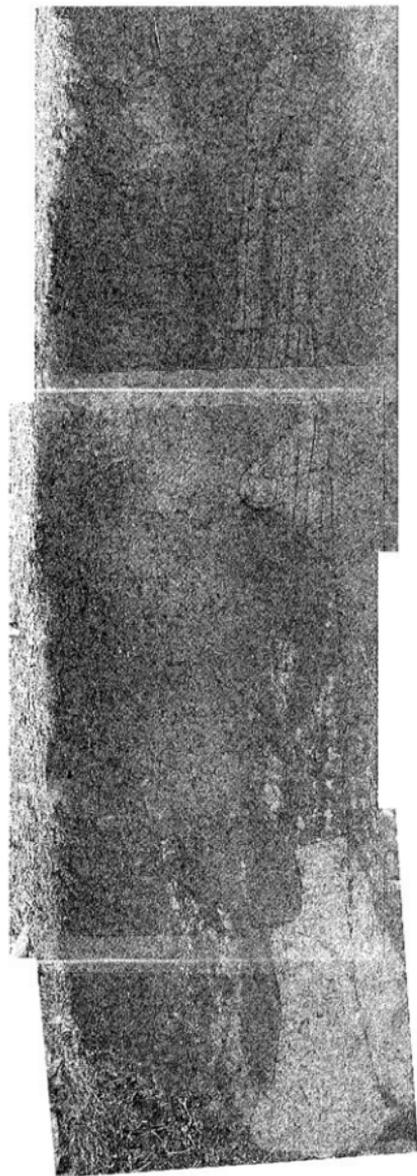
登城道に堆積した埋土を掘り下げる作業である。埋土から中世遺物の出土を見た。



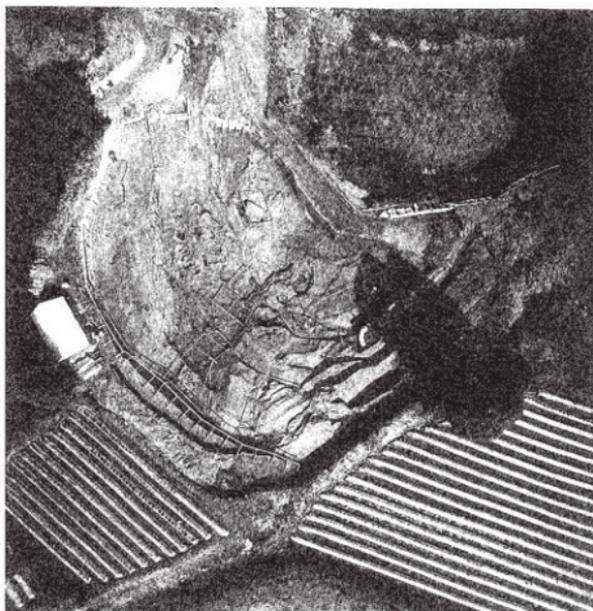
図版7 3段目の版築土器



図版 8 3段目の版築土塁（東端寄り）
谷部の斜面に積まれた版築土塁の東端を示す。



図版9 3段目の版築土壁（西端寄り）
地山（桃色ローム土）部分と版築土壁の基礎部を見る。



図版10 航空写真① (16次調査区を真上から)



図版11 航空写真② (調査初期)



図版12 航空写真③ (米原台地を南東側上空より遠望)



図版13 航空写真④ (米原台地を南側上空より遠望)



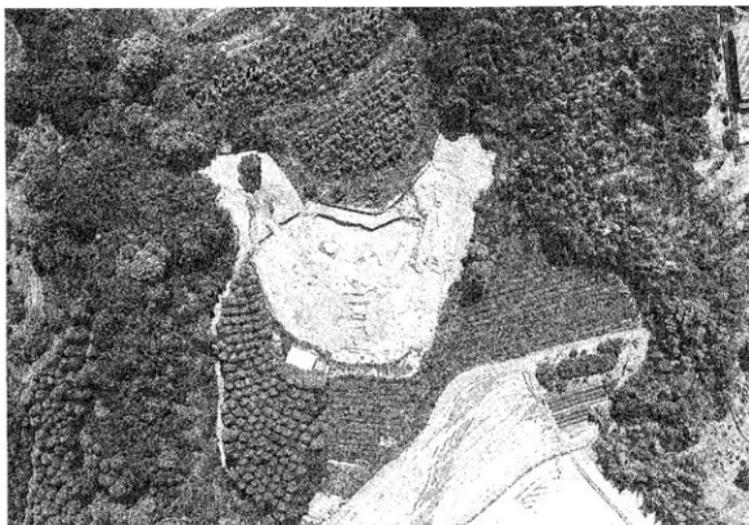
図版14 航空写真⑤ (米原台地を南西側上空より遠望)



図版15 航空写真⑥ (米原台地西側の外縁地区を遠望)



図版16 航空写真⑦ (米原台地南側の迫地を東側から望む)



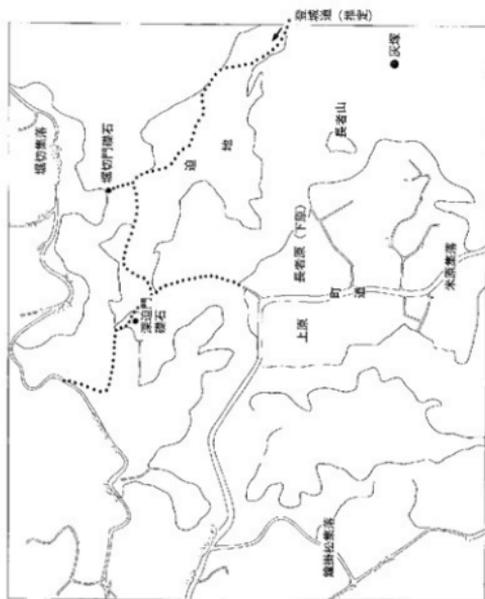
図版17 航空写真⑧ (16次調査区)

晉敬運 (車道)



図版18 航空写真③（駒智城跡の南東域を俯瞰する）

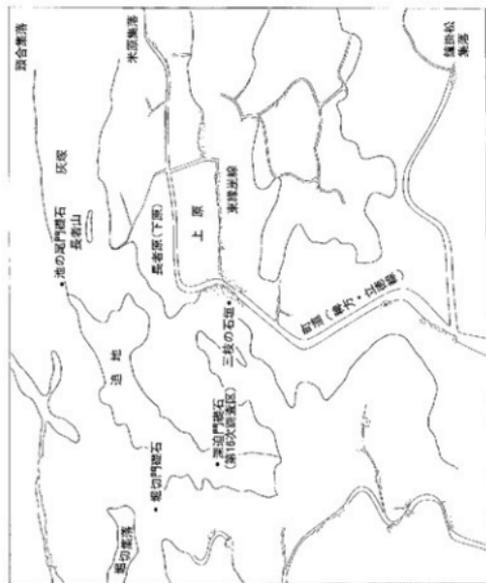
- ①帯状形の過地から延びる栗道が町道と交わっている。栗道の原形は登城道にあると思われる。
- ②城上部に堀切基岩が写っている。左下側は統計広集落、最上部は米原集落である。
- ③駒智城跡の周辺には、このような谷部がいくつも入り込んでおり、複雑な地形を示す事がわかる。
- ④右側に長者山や土塁線の一部（灰塚）を見ることができる。





図版19 航空写真①（鞆智城跡を東方向から遠望する）

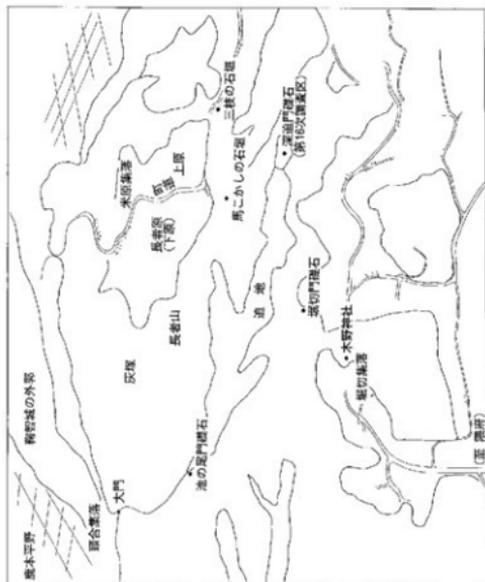
- ①木居古地から抜け出る町道の南壁の一部に三柱の石垣がある。町道が切り立った野首（丘陵のくびれ部）を利用している事がわかる。鞆智城時代はこの野首は当然、遮断されていたと見る。但し、町道の壁面に此山の凝灰岩が露呈しており、連続した地形である様にも思え、疑問も残る。
- ②城下の東縁道路とその南部の谷部をよくあらわした写真である。
- ③城下部の石手へ延びる道路は楳垣松葉落（城外にあるが大字米原に含まれる栗落）への古道である。
- ④鞆智城のいわゆる竈の手部分を示す写真である。

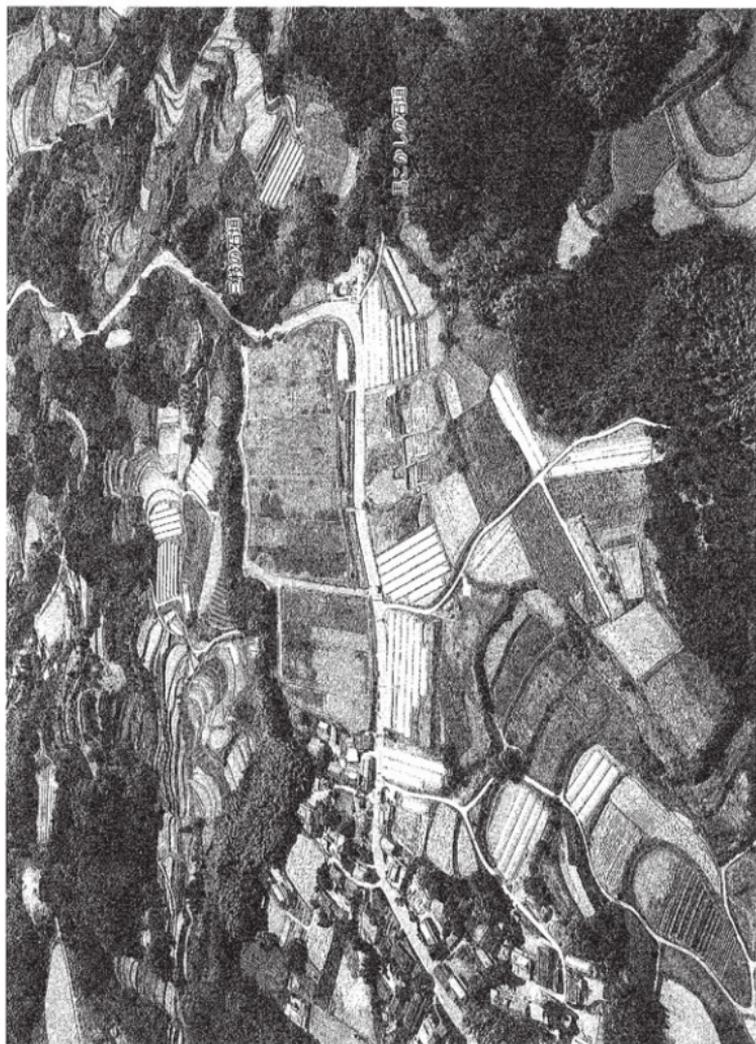




図版20 航空写真①（輪郭城跡を南西方向から透望する）

- ① 城域の南側並縁下にあたる掘切集落の様子がよくわかる。集落から南下する2本の直の原形は菊池市の藩府へ通じる古道である。
- ② 米原台地の前麓部にある道地が西下方向へ延びており、出口に「大門」箇所がある。
- ③ 3カ所の門礎石の箇所をこの写真で知る事ができる。特に池の尾門礎石が道地の大きな括れ部にある事がよくわかる。
- ④ 最上部の山は輪智梁の外郭である。突端部に環合集落が開けている。
- ⑤ 左上隅に委里の城跡を残す鹿本平野が写っている。





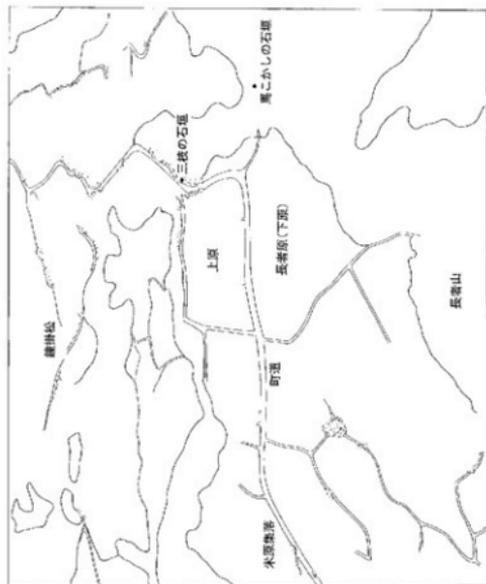
図版21 航空写真②（輪郭城跡を西方向から透望する）

①下部は米原台地の南側国線である。この線部に池の尾門處に至る帯状形の近地がある。

②左半は米原集落である。集落が台地の北東隅に片寄って成立している事を知る。大方の家屋は台地の段落ち部分に建っている。広域的に見れば馬蹄形状の臺地に集落が展開する。

③左下隅に近地の谷頭が写っている。近地は弓形を描きながら北下し、瀬部は町道と出会っている。その接点近くに湧水地「長者井戸」がある。

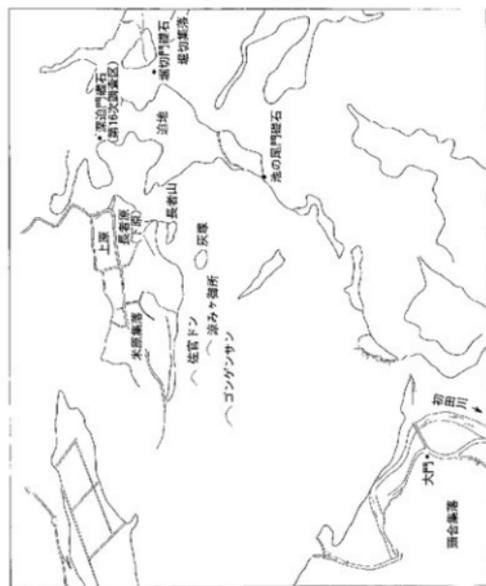
④米原台地の東下にある近地が写っている。その東側上段部に楯形松葉落が展開する。





図版22 航空写真⑬（轉智城跡の西域を俯瞰する）

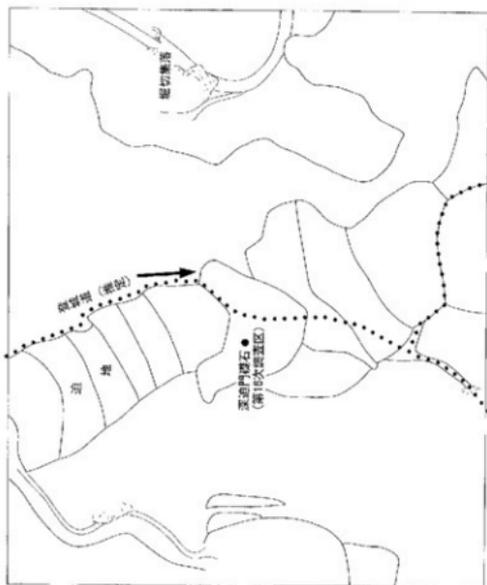
- ①轉智城跡西側の長者山・土塁線・南側の屋線・追地の様子が見える。
- ②深迫門礎石、堀切門礎石、池の尾門礎石の位置関係が見える。
- ③左下は鎮合集落である。町道が追地へと別れる箇所が「人門」口と称されている。





図版23 航空写真④（深泊門跡調査区一帯）

- ① 中央部分が調査区となり、これから下段が谷部を利用した段々畑となる。上段は帯状を呈する追地の東端部にあたる所で、これより西側へ向って階段状地形が連なる。（現在は、開田されて水田となっている）
- ② 調査区については東側へ下る谷部の谷頭に当たっている。門礎石があるものの、これにつながる古道は存在しない。
- ③ 右手（北側）に「馬こかし石垣」を有する谷部である。縁域では南東隅の崖線にあたる。
- ④ 左手（南側）に堀切集落の東域を撮影している。



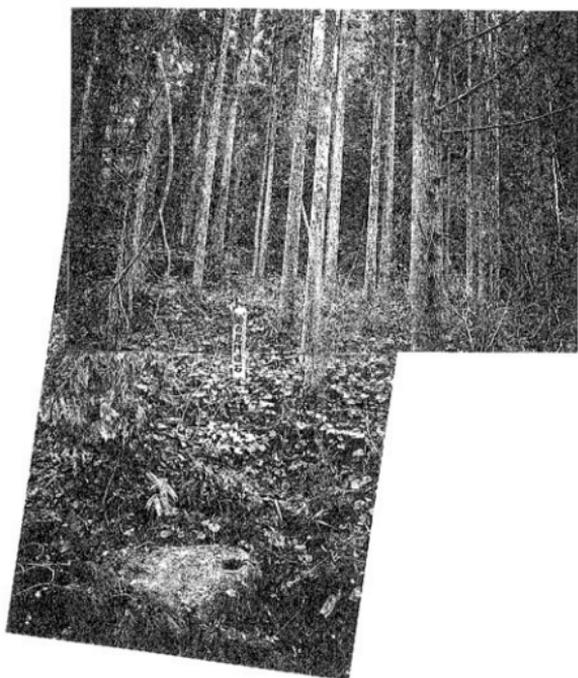


図版24 航空写真⑨(池の尾門礎と「大門」ルート)
 帯状形の迫地を西下する古道の様子がわかる。





図版25 池の尾門礎石
現在、池の尾門礎石は谷川の中
の落下した状態にある。



図版26 池の尾門礎石
池の尾門礎石の南面は土累線を形成する丘陵斜面となる。



図版27 土塁線写真 イ



図版28 土塁線写真 ロ

イ・ロとも、景観上、最も土塁線の形態を有する箇所である。山腹の傾斜は城外にあたる左側が急で、城内の右側が緩傾斜をなしている。この点で古代山城における土塁線の理にかなっている。



図版29 土塁線写真 ハ（東側より）



図版30 土塁線写真 ニ（南側より）

ハ・ニは土塁線の中における「涼みヶ御所」と称される小山である。写真で見ると法面は中世城と同様に急峻に削り落されている。



図版31 土塁線写真 ホ



図版32 土塁線写真 ヘ

ホ・ヘは菊鹿町教育委員会が「鞠智城の土塁線」との標柱の建てている箇所である。「涼みヶ箇所」の南側手前の土塁線上にある。別辺一带は小山状の高まりを見せる。



図版33 堀切集落と鞠智城跡の最南縁崖線

写真で見る様に、急な崖線は高さ30m程にも及び、急傾斜危険箇所指定されている。



図版34 日の岡山の遠望

鹿本平野の西側に見る山で、山頂は鞠智城跡に関連した烽火の跡地ではないかと見る向きもある。

熊本県文化財調査報告 第152集

鞠 智 城 跡

— 第16次調査報告 —

平成7年3月31日

編集発行

熊本県教育委員会

〒860 熊本県熊本市水前寺6丁目18-1

TEL (096) 383-1111 (代表)

文化財調査第2係 (内線 6716)

印刷

株式会社 大和印刷所

〒862 熊本県熊本市戸島町920-11

TEL (096) 380-0303

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 152 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：鞠智城跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日